
墓守キッチンヨムのおとぎ話

maruzhiye

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墓守キツチヨムのおとぎ話

【Nコード】

N5274X

【作者名】

maruzhiye

【あらすじ】

この物語は、ヨーロッパ風（設定はフランスですが、架空の世界です）のとある教会から始まります。

主人公キツチヨムはソルマウント教会の墓守をしている若者です。ソルマウントの墓守、それは夜な夜な墓場から這い出てくる死人たちの世話をする仕事。そしてデスダスト、死人を腐敗から救う薬をつくることだった。

友人である謎の死人、スタンリー・ベルフォードとともに町に現れる怪物たちと戦うはめになり、そのことでキツチヨムの人生が大きく

く変わっていく…。というストーリー。

この作品は他サイトと重複予定です。

プロローグへ地獄の入口

プロローグ《地獄の入口》

『むかし、むかし…。』

あるところにルカという墓守がいました。

彼は地獄から地獄の炎を持ち帰りました。

その炎を使うことによって何年もかかっていたデスダストの製造が、

たった数日でできるようになりました。

死人たちはデスダストを使って腐敗を防いでいたので、

大喜びしましたとさ………』

赤い炎渦巻く地獄の大地。

天を覆う炎はまるで流れる雲のようにゆらゆら揺れている。

大地は黒い土に埋め尽くされ、河となった血が湯気を立てて流れていく。

溶岩のように噴出した血が亀裂となって見渡す限り広がっている。

風が吹きすさび、赤い落雷がところ構わず落ちていく。

雷鳴がとどろく中で人間の悲鳴が遠くから、うなるように聞こえてくる。

そんな地獄に二人の墓守がやってきた…。

一人は大きな黒い修道服姿の男。大きな艶のあるマントを羽織っている。

もう一人は幼い子供。小さな薄汚い白い修道服を身に着けている。

赤い炎は彼らを見つけた。炎は渦となって地表に落ちてくる。帰れ…！帰るんだ！ここはお前たちがくるところではない！！

幼い子供は肩をすぼめて男のマントの中に隠れた。

男はマントで幼い子供を包んでやった。

大地の黒い土は耳をそばだてた。おまえらはいったい何者だ…、聞き逃すものか…！聞き逃すものか…！！

『われわれ墓守は命を懸けてきたのだ…。デスダストを少しでも完璧なものにするために…。見るがいい、ここが我々の聖地だ…』

落雷は更に数を増やした。雷鳴がとどろく…。やつらが来た…！
奴らが来たんだ！！墓守が来た…！！

幼い子は体を震わし男の足にしがみついた。

『いいか、キツチヨム約束してくれ…、決して掟に背かないと…。掟は墓守が命を落とした証拠だ。ルカのようにすぐれた業績は残せ

なかったが、彼らはわたしたちにくっつかのタブーを残したのだ…、
わかるな？」

地表を流れる赤い血は怒りで煮えたぎった。ルカ…。ルカ…。あの
コソ泥が！！墓守が！！

幼い子供は必死に頷いて見せた。男が幼い子供の頭に手をのせ跪い
た。

『もう帰ろう…』

風は猛威を振るった。恐ろしい勢いで彼らを取り囲む。帰すものか
…！お前たちを八つ裂きにしてやる！！

幼い子供の目から大粒の涙がいくつも落ちる。

『帰ろう…。墓守は地獄の入口からけっして足を踏み出してはなら
ない。ここが地獄の入口だ。私たちが入ることが許されているのは
ここまでだ…』

幼い子供は手を伸ばし男の首に手を回ししがみついた。

風は地獄の亡者の叫びを彼らの耳に運んだ。たすけて…たすけて…。
聞こえるか？聞こえるか！？この叫びを！

さあ、一步踏み出すんだ！！一步でいい…そうすればお前らを八つ
裂きにしてやるのに…！！

男が幼い子供を抱き上げ立ち上がる。まるで立ち上る湯気に飲み込まれたかのように二人の姿は消えてしまった。

天の炎は荒れ狂い地上を焼き尽くそうとする。

落雷は地上のあるあらゆるものを破壊し隠れ場所を奪おうとする。

雷鳴は叫び声をあげ地上を揺るがした。

黒い大地は彼らを探すためさらに耳をそばだてた。

風は吹き荒れ気が狂ったように地獄を駆け巡った。

地獄の亡者の苦しみは増し、阿鼻叫喚の世界が地獄を埋め尽くした。

八つ裂きにしてやる…！八つ裂きにしてやる…！

しかし、その声を聴くべき者はすでに地獄を去ったあとだった……。

1・キツチヨムとスタンリーベルフォード

灰色の道と微かに揺れる木々を月の明かりがやさしく照らし出している。遠く山々のシルエットは夜の闇に深く腰を下ろしていた。虫たちはまるで囁きあっているかのように静かに泣いている。その夜の静けさのなかに一層濃い影を落とす若者がいた。季節外れの灰色のマントを肩にかけ、フードで頭をすっぽりと隠している。

ソルマウント教会は遠く町から離れ、深い森に囲まれている。その教会の墓場を囲う柵に腰掛けて、キツチヨムはぼんやりと月を眺めていた。オーハン・キツチヨム・ギボンス、それが彼の名前だった。微かにカールした黒髪は不ぞろいで乱暴に切っただけなのがそれとわかる。黒い瞳は深い二重で、寝不足の腫れぼったい目をしばしばさせている。頬にうつすらとそばかすがあり愛嬌のある幼さの残る顔立ちをしている。

月は掛布団を引っ張り寝返りをうったかのように黒い雲の向こうに顔半分を隠してしまった。虫の声に耳を傾けると、虫たちの泣き声はさらに声をひそめて、やがて暗い木々の陰に消えてしまった。

キツチヨムは深いため息をついた。頭を垂れ視線を汚れた黒いブーツに落とす。汚れたブーツの向こうに灰色の地面が広がっている。柵から降りると立て掛けておいた鉄の鉤棒を手にとった。まるで地面に引っ張られているかのように重く、ずっしりとしている。鉤棒の先は三つ又に分かれ、まるで鷹の爪のように鋭く曲がっている。三つ又に分かれた鉤棒の先は一本だけ新しく溶接され、微かな月の光を受けて銀色に輝いていた。指でその一本を撫でながらまたキツチヨムはため息をつく、その時だった。微かに教会の窓が揺れた気がした。いや揺れたのは窓ではない。教会の行動に大きな窓がいくつかあり、そのひとつがどうやら開いているらしい。窓は地面にうつすらと温かい光を投げかけていた。

『揺れたのは光だ…』

キツチヨムは舌打ちをすると手にずっしりと乗りかかっていた鉤棒を持ち上げ、地面を弾いて飛び上がり、なんなく柵を飛び越えた。まるで猫が暗い夜道を横切るように首を低くし音もなく墓場をかけていく。窓の傍にたどり着くと壁に背中を押し当て中の様子を伺う。息を殺し耳を澄ます。物音一つしない講堂の中に人の気配を感じる。キツチヨムは鉤棒を握りしめた、しかし自分では気づかないうちに口元に微かに笑みを浮かべていた。

『わかつてるんだ……。僕の様子を伺ってるんだろ……。』

キツチヨムは心の中でそうつぶやくと窓枠に手をかけ一気に講堂に飛び込んだ。

その時だ、恐ろしく鈍い音が頭に響いた、額を激痛が襲い目の前が激しく揺れた。

「あが……！」

講堂にいた男も窓に顔を近づけていたらしく額同士を激しくぶつけたのだ。男は低いうなり声を上げながら地面をのた打ち回り、テーブルの下に転がり込んでしまった。

「くそ……！」

キツチヨムもはげしい痛みに耐えかね額を抑えながら、こぶしで壁をなぐりつけ悪態をついた。左目からとめどなく涙があふれる。どうやら目もしたたかぶつけたらしかつた。男はテーブルの下に潜り込んでしまったままだ。瞬きを繰り返し床に横たわる鉤棒を見つけた。鉤棒に手を伸ばすと一本のロープが床の上を蛇のように滑りキツチヨムの足を掴もうとした、慌てて足を上げ蛇の頭を踏みつける。ロープはぴんつと張り、キツチヨムの足の下でもがいている。キツチヨムは笑みを浮かべ腰をかがめて鉤棒を握った。テーブルの下をのぞき込みむと血色の悪い青白い顔をした男が向こう側でにやにや薄ら笑いを浮かべている。暗いテーブルの下に浮かぶ顔、緑色に変色した隈の上にブルーの瞳。眉が楽しげに上下する。

キツチヨムの口元から笑みが消えると同時にロープが激しく波打つ。男はロープを縦に振るう、一瞬にして蛇が息を吹き返したかの

ように空を切り裂き、幾重にも波を打った。蛇はキツチョムの右ほほを激しくひっぱたき、講堂に激しい音を響かせた。

「ぎゃっ……!!」

今度は右目から涙があふれ出した。

「おいおい、大丈夫か……?」

キツチョムが床にふさぎ込むと男はテーブルの上に顔を出した。

その瞬間握っていたロープがテーブルの下に男を引きづり込もうとした。男の顎が激しくテーブルに打ち付けられた。

「うぐっ……!」

「ははは……!」キツチョムがロープを持って立ち上がった。

「ぐっ……ふざけんよ……」

「どっちがだ! スタン、君は地下室からでちゃだめだろ? みんなに見つかったらまた大事だよ」

「ちよつとお前を探しに來ただけだろ? それに、講堂の外には一歩もでてないぜ?」

「一歩たりとも出すもんか! くやしかったら出てみなよ、どうせ戻ってくるんだから!」キツチョムは息をのみながらスタンリーを激しく睨み付けた。

「はあ? ……ロープ離せよ……」スタンリーのキツチョムを見つめる目がすわっている。青白い顔は血が通っていない証拠だった。彼は死人だからだ。金色の美しい髪は白く成り果てていたが、肉体はいたって衰えていないようだった。ロープを握る腕はまるで鋼を磨いたかのような光沢を放っていたし、ロープをまるで自分の体の一部のように扱うことができた。

「いやだ……」

「ああ! …?」

「今日はこのロープで君を縛り上げてやる……」

「……いうじゃないか……はなせ!」

「いやだ!」

二人はロープをきつく握りしめ強く引いたり緩めたり、引っ張り

合いを幾度となく繰り返した。その度にテーブルはガタガタと音をたてる。

二人の綱引きは引けば引くほどますます激しくなり最後には頭の上に持ち上げ激しく引きあつた。二人がはたと我に返ったときには時すでに遅く大きな六人掛けのテーブルが宙を舞っていた。

テーブルは隣のテーブルの上に激しく乗り上げ、椅子の上に転げ落ちた。凄まじい音が講堂に鳴り響いた。

「ああ……」

「キツチヨム、今のはまずいだらう……」

「いそいで！もとに戻すんだ！」

「あ、ああ……」

キツチヨムがテーブルに駆け寄ると遠くから足音がバタバタと聞こえてくる。キツチヨムが講堂の扉に目をやった。ドアを激しく叩く音、キツチヨムを呼ぶモリスの声が聞こえた。ドアノブがギシギシと鈍い音を立てて回りはじめる。そして、空を切るロープの音。ロープはまっすぐドアノブに飛び、激しく波打った。グニヤリと首をねじると観音開きの二つのドアノブに食らいつき巻きついた。スタンリーがぐつとロープを引っ張ると固く結びついた。モリスがガタガタとドアを揺らしている。

「キツチヨム！いるんだらう！いったいそこで何をしているんだ！」
スタンリーは顎に手を当てて何か考えている。キツチヨムと目が合うと手をあごから離し、指先を口に当てだまっていると促した。

「キツチヨム！ここを開けるんだ！」モリスが扉をたたく音が講堂に響き渡る。

スタンリーは鼻から息を吸いドアをじっと見つめた……。

「……にや、にやあー……お……」

「え………」

講堂が冷たい静寂に包まれ、いつもの威厳を取り戻したかのよう
に思えた。できればこの静寂が永遠に続けばいい、キツチヨムはそ
う思った。

目の前に立つスタンリーは静寂に聞き入り満足げに指をたて、笑みを浮かべた。

なんのことはない、いまこの瞬間、キツチヨムの恐れる最悪の事態を作り出したのはほかならないこの、スタンリー・ベルフォードだ！
「スタンレイイイ！」ドアの向こうでモリスの金切声上がる。「スタンリーベルフォード！そこにいるんだな！」ドアを叩き、今にもぶち破らんばかりだ。

キツチヨムはドアに駆け寄った。ドアに手をあて意を決したようにこう言った。

「…スタンリーは、確かにここにいる！」

スタンリーは慌ててキツチヨムに手を伸ばしたが、すぐにあきらめ首を振った。

「聞いてくれ！モリス、扉を開けちゃだめだ！その…デスダストが講堂に充満してるんだ、新しいデスダストを作ったんだ！」

モリスが扉を叩く音が止まった。

「それで、デイブイがぶつ倒れたんだ、痙攣をおこして白目を向いてる、外の空気を吸わせるのにスタンが手伝ってくれたんだよ！デイブイの巨体は僕一人じゃ無理だろ！？」

「キツチヨム！見てくれ！デイブイの奴、口から緑色の泡を吹きだしたぞ！！」

スタンにはやにや薄ら笑いを浮かべながら叫んだ。キツチヨムが睨み付けると我知らずを決め込んだ。

「ああ…いまここはデスダストに汚染されてるんだ！明日にはもと通りだ約束する！」

「ほ、ほんとうにもとどおりになってるんだろうな…！？」「ドアの向こうでモリスの弱々しい声が聞こえる。

「ああ、大丈夫、明日にはすべてもとどおりだ」

「キ、キツチヨム、まかせたぞ。私は明日はやくに神父様を教皇議会にお連れしなくてはならないのだ…」

「わかってる、おやすみ！寝坊したら大変だ」

「そう、そうだな…、じゃあ、頼んだぞ…」モリスの逃げるように遠ざかっていく足音を、ドアに耳をあてて確かめるとキツチヨムはほっと胸をなでおろした。

「機転が利くな、はは。さてこのテーブル片づけて、さっさと地下室へ行こうぜ、酒盛りといこう」スタンリーは手をひとつ叩いた。弾ける音が講堂に響き渡る。

「ああ…」

スタンリーは気のない返事を聞くと転がる椅子を片づけようとするキツチヨムを見つめた。

だまつて椅子を片づけていたキツチヨムが机に手をかけるとスタンリーは慌てて机に駆け寄り手伝った。

「みんな、お前のことを待ってるんだ」スタンリーがキツチヨムの目を見つめた。キツチヨムは笑って見せただけだった。その笑みはどこかさみしく、スタンリーを不安にさせた。

「地下へいこう…」

スタンリーが何か言おうとするのを遮ってキツチヨムはそうとうと歩き始めた。手に付いたほこりを払いながら壁に並ぶ蝋燭台の一本を力強く引いた。低い音が響く、教台の傍の床が動き出し地下へ降りていく階段が現れた。

スタンリーは階段にに向かうキツチヨムの後姿をぼんやり眺めるのをやめ、慌てて後に続くのだった。

2・肉屋の娘、マルゴーとアルト、そして『踵にバネを持つ男』

暗い闇がグレスデンの町を包み込んでいた。夜に漂う黒雲に月が完全に覆われるとグレスデンの町の灯さらに温かく光り輝くのだが、今日は少し違っていた。この日はほんやりと霧が漂っていた。光はかき消されるように遠くに感じるばかりだった。そしてこの霧が数日間グレスデンの町にとどまることをこのとき誰も予想してはいなかった。

タムズの肉屋の看板が海の上を漂う船のように霧の中にほんやり浮いている。大きな豚の横顔にタムズと書かれたその木製の看板は扉の傍に太い2本の鎖でぶら下げられていた。タムズの店に代々うけつがれてきた自慢の看板だった。

タムズの肉屋は、口数は少ないが太った気のいい父親と二人の娘が商売をしていた。母親はすでに他界し、店主は口数が少ないが、しっかり者の姉のマルゴーがお金を管理し、愛嬌のある妹のアルトが客の相手をしており、娘たちのおかげでタムズの肉屋は繁盛しているようなものだった。

店内では二人の姉妹が慌ただしく口だけを動かした後片付けをしている。姉のマルゴーは妹の恋人について納得がいかないらしくここ数日小言を言い続けているのだ。アルトはずっと姉のご機嫌をとりながら話をしていたが、まるで壁に話しかけているような気分だった。話しかけるたびにつらく、不安になっていく。

「姐さん、フランクは丈夫な靴をつくれるわ。いちど彼に靴をつくってもらいましょう」妹のアルトは大きな肉の塊を木の盆にのせ、無理に笑みをつくりながら言った。横目で姉の反応をじっと見ている。

マルゴーはそのキリットした眉をピクリとも動かさない。整った顔立ちと薄い唇、聡明でとても美しい女性だ。しかし、人の目を見て話すことをしない、それでいてはつきりとした口調や冷静な物言

いをする。それは彼女が動揺して目をあわさないのでなく、目の前にいる人間を相手にしていない証拠だ。そしてその仕草や話し方があらゆる人間に冷酷な印象を与えていた。

「ふざけないでちょうだい。わたしの靴はデニスをつくったものよ。親方の作った靴は一番丈夫だもの、それに息子のアデスが跡継ぎでしょう。フランクは職人じゃないわ、ただの使用人でしょう」

「そう、そうよ、ただの使用人。そう…、だから、その…あたし、思い切って言うわ！」アルトは一度持ち上げた気の盆を再びテーブルに置いた。いや、勢い余って叩きつけたのだ。マルゴは驚いたようにアルトを見つめた。

アルトの大きな瞳がまっすぐ自分を見つめていた。ほつれた髪が頬に張り付き一日の労働の疲れをあらわしていたが、小柄な顔に大きな瞳、小さな鼻先が微かにうえを向いていても可愛らしい。笑うと驚くほど大きくなる口がいまはきつく結ばれている。両腕をテーブルにのせ身を乗り出してくる。マルゴは気迫に押されるように上半身をのけぞらし、手に持っていた木の桶をきつく抱きしめた。

「な、なによ…。言いたいことがあるならいいなさい…」

アルトは瞳を閉じ深呼吸をした。瞼を弾いて目を見開くと大きな瞳がさらに大きくなった。

「フランクが言ったの！店を出すって！二人で店を出そうって！…あたしたち結婚するの…彼はもう使用人じゃないわ、りっぱな靴職人…！！」

「わたしに恥をかかせないでちょうだい！！」マルゴは叫ぶやいなや抱きしめていた木の桶をテーブルに叩きつけた。「ふざけないでちょうだい！ふたりで靴磨きでもやるつもり！？そんなこと、そんなこと父さんも許さないわよ！！」

いまやアルトの肩はちいさく縮こまり、テーブルに置いていた手は胸元できつく握りあわされていた。瞳からこぼれ落ちそうな涙でゆらゆら世界が揺れていた。

「ねえさん、父さんはいいって…、ただ……」

「なに？はつきりいいなさいよ、父さんも許したわけじゃないんでしよう！？」

「ねえさんが先に結婚しないとダメだって……」

「なんですって！」「マルゴーの手が、体が、怒りと恥ずかしさで震えた。「わたしの…わたしのせいだっていうの……」

「…ねえさんが、ねえさんがこの家にいつまでもいるからいけないのよ！！」「そういうとアルトの目から耐えかねたのように大粒の涙が頬をつたった。アルトはもうこれいじょう姉の前に立っていることができなかつた。逃げるように駆け出すと二階への階段を駆け上がっていく。

狭い階段に父親の姿を見た、心配そうにアルトを見ている。なにが言いたそうにしているが口元をまごまご動かすばかりで言葉は出てこない。タムズの太った体のわきを小さくなつて通り抜け階段を上がると自分の部屋の扉を開いた。暗い部屋の中に飛び込み後ろ手にドアを閉じる。込みあげてくる嗚咽とともに涙があふれ出た。

マルゴーが椅子に腰かけうつむいていると階段に人影をみた。タムズが心配そうにマルゴーを見ている。

「父さん…、いま、一人にしてほしいの…」「マルゴーはいつになく力ない声でいった。

「ああ…、わかつている」「マルゴーに背を向け階段に足をかけたが踏み出すことはしなかつた。タムズは低く小さな声でこういった。

「すまない、お前には先に話しておくべきだったな…。わたしも後悔している、わたしのせいだ、二人を傷つけてしまったようだ…おまえさえよければ、近いうちに式を……」

マルゴーは目を閉じうなづく、両手で顔を覆った。

タムズはマルゴーがうなづいたのを見ると、少し安心したように微かに笑みをみせ階段をあがっていた。

マルゴーは泣いているのではなかつたし、納得したのでもなかつ

た。ただ暗い世界に身を置きたい気分だった。指先からこぼれてくる光を遮るように指先に力を込めて光をふさいだ。まるで仮面をかぶっているようだ。マルゴーは静かに呼吸をして目を閉じた。

男は顔に張り付いている仮面を手でぐいぐい押し付けている。とりたくても取れないその仮面を押さえつけているのはどこからともなく漂ってくる鉄のにおいが鼻先をくすぐっているからだ。男の仮面は下半分が崩れ落ち焼けただれた口元があらわになっている。屋根の上から漂う霧の中に身をなげると通りの石畳に鉄の響く音がこだました。男の体はまるでヤジロベエのように右に左にゆれている、そして体が曲がり普通の男性の半分ほどの大きさだ。黒いマントで体をつつま常に地面に片手をつけて体のバランスを取っていた。遠くにぼんやり浮かぶ肉屋の看板を見つけると嬉しそうに鼻をならし、猿のように片手を石畳に擦りつけながら不器用に歩いていく。

男の目に木製の看板をつなぐ2本の太い鎖が目に入った。男はにやりと笑うと嬉しそうに肉屋のドアに歩み寄っていく。

マルゴーは目を見開き、両手をテーブルに置いた。唇をきつく結ぶ。アルトがフランクと結婚…？まさかこんなばかげた話をきかされるとは思ってもみなかった。町の間人が聞いたらどう思うかしら、きつとアルトのことを憐れむにちがいない、わたしがついていながら、そう思うにちがいない。

結婚…、それともわたしはアルトに嫉妬しているのかしら…？わたしがこの結婚に反対していると知ったら町の間人はわたしがアルトに嫉妬していると思うかしら…。許せる、わたしはアルトの姉ですもの、アルトが幸福なら…。

でも、相手があのフランクなのよ…靴屋の使用人のくせして、あの男にどんな靴が作れるというの？売り物の靴を磨くしか能のないあの男にお金が稼げる？稼げるわけない！

店を構えるですって！？あの男は父さんのお金をあてにしてるだけ、

私たち3人で稼いだお金よ。1フランだって渡しはしないわ！

わたしはアルトがかわいい。アルトの幸福を心から願ってる、嫉妬なんかじゃない。アルトのためよ、アルトのためなの…。

フランク…わたしはこの結婚を絶対に許さない！あなたを絶対にゆるさないわ。

マルゴーはきつく手を握り、アルトが残していった肉の塊を睨み付けた。うんざりだ、肉屋だなんて…、恥ずかしい…。豚や牛の死肉を切り売りするだなんて…。ただでさえ肉屋なのに、妹が靴屋の使用人と結婚、あんなに可愛らしい妹なのに…。許せないわ、フランクも…なにもかもよ！

そのときだった。ドアに何かが叩きつけられ鈍い音が部屋に響き渡った。マルゴーは驚き椅子から立ち上がった。ドアを見つめながら後ずさった。鎖が引きちぎれる激しい音が聞こえた。

恐る恐るマルゴーはドアに近づいていく。そして、ドアに手をかけ、なにか声をかけようと口を開くのだった。

アルトは床に跪き上半身をベッドに投げ出して声押し殺しながら泣いていたが、少し落ちて着いてくると立ち上がり、ヒクツヒクツと喉をならしながら、窓の傍へ歩み寄った。顔を上げ月を探したがどこにも月は見当たらない。肩を落としたため息をついた。まるで月にも見放された気分。窓の下は濃い霧におおわれている。手を窓にあてアルトは不思議そうにその霧を眺めた。

その霧の中に足を引きずるように前進する人影のようなものを見た。人影というよりなにか小さな虫のように思えた。

窓のすぐ下は屋根でおおわれており人影が見えなくなってしまった。窓に顔を近づけ下を眺めていると、階下で激しくドアを叩く音が聞こえた。

こんな時間にお客さん…？

アルトは窓から手をはなし、ベットに逃げ込んだ。横になって枕

を引き寄せると、姉のマルゴーのことを考えた。きつと姉さんはお客さんを追い払うわ、姉さんにお客さんを愛想よく迎えることなんてできない。

アルトは体を起こし、座りなおした。枕を抱きながら考えた。お客さんの相手をするのは私の仕事だ。姉さんじゃムリ、追い返すにしても、お肉を売るにしてもきつとお客さんは気分を害するわ。

アルトは立ち上がったが、枕は抱きしめている。

でも、いまは下に降りたくない！いいわ追い返すなら追い返せばいいのよ。わたしはしらないわ。姉さんが一人で何とかすればいいのよ。姉さんの顔なんて見たくないもの！

アルトはベッドに横になり枕を頭に寄せ、耳を塞いだ。だが今度は激しくドアに何かがぶつかる音が聞こえた。枕で塞いだ耳にもその音が聞こえるほど激しい音だった。

ノックじゃない…。

アルトはベットに起き上がると枕をぎゅっと抱きしめている。心臓が激しく鼓動するのがわかった。とても恐ろしく感じた。

タムズの部屋の扉が勢いよく開く音が聞こえ、大きな足音が部屋の前を騒がしく通り抜け階段を下りていく。アルトは枕を放り投げて扉にかけよった。

「ギヤアアアーツ！！」マルゴー恐ろしい金切声上がる。聞いたこともない悲鳴とともに窓の外が明るくオレンジ色に光った。振り向き窓を見たが恐ろしくて外を、見る気にはなれなかった。恐ろしさでただドアを開き父親の後を追うことしかできないでいた。

「マルゴー！！」タムズの叫び声が聞こえる。

タムズの後を追い階段をいそいで降りていく、階下に降りると扉の向こうに大きなタムズの背中が見えた。霧の中にしゃがみ込み倒れているマルゴーを抱きしめているのがわかった。何度も名前を呼んでいるがマルゴーの体は石のように動かない。

「姉さん！姉さん！」そう叫びながらタムズに駆け寄った。タムズの背中に触れ跪ずきなんとも姉さんと叫んだがマルゴーは動く様子

がない。マルゴの肩から上は焼けただけ、美しい黒髪はあと方もなく消え、黒い塵のようなものがそこらじゅうに散らばっている。白い煙が肉が焼けるにおいとともにあたりに漂い、髪を焼いた異臭が立ち込めている。

タムズがマルゴの体をアルトに引き渡し立ち上がった。涙の止まらない瞳をあげてタムズが睨み付けるさきを見た。そこにはあの黒い人影があつた虫のような人影はこちらに背中を向けてもぞもぞと動いている。

月が顔を覗かせあたりをうつすらと照らし出した。

常人の半分ほどの小さな男は鎖の音を響かせて、肩に豚の首をぶらさげた、横顔がちらりと見える、男はアルトとタムズを見つめてうれしそうにクツクツと音を立てて笑っている。

タムズは訳の分からない叫び声をあげながら男に駆け寄っていく。アルトは何度も父親を呼んだがタムズの耳には届かなかつた。

すると男は鉄がはじけるような音を立てて高く飛び上がったのだ。タムズの頭の上を飛び越えると恐ろしい速さでアルトに向かって飛びかかってくる、アルトの耳にさらに鉄の音が響いた。

「アルトオオオオ！」タムズの泣き叫ぶような声が聞こえた。

男の恐ろしい顔がまじかに迫っていた。男の仮面は鼻も描かれず、細い線で描かれたような目があるだけ。赤い炎のような瞳がちらちらと光っている。仮面の顎の部分は割れて焼けただれた唇が露わになっっている。

割れているのは顎の部分だけではなかつた。仮面を突き破る二本の角、一本はすでに根元から折れているらしかつた。ヒビが蜘蛛の巣状に広がっており、それは角が仮面に施されたものではなく生身の体から生えているものであることを物語っていた。角はゴツゴツしており小さな穴やへこみがある、まるで穴だらけの醜い石のようだった。

アルトは恐ろしさで身動きできず、ひたすらマルゴの体に縋りつき顔をうずめた。

男は石畳の道に踵を叩きつけるとさらに高く飛んだ。月に向かって驚くほど高く飛び上がり遠くの屋根に飛び乗った。太い鎖を月の光の中で撫でながら満足そうに笑みを浮かべた。

男はアルトやタムズには目もくれず闇の中に姿を隠した、屋根を蹴る恐ろしい鉄の音を響かせて……。

3・地下室の宴

暗い階段の入り口に腰ほどの高さの台があり、ランプが一つ置いてある。キツチヨムはそのランプに火をともした。キツチヨムの顔が橙色に照らし出さるのをスタンは傍で見つめていた。

階段を下りていくと短い通路がある。そしてその通路を行くとまた階段……。地上から離れていくにしたがって、笑い声や楽器の音が微かに聞こえてくる。それらのたんなる響きはやがてはつきりとした言葉になり、歌になり楽器が奏でる音楽となつて聞こえ始める。

キツチヨムの目線の先にぼんやりと浮かぶ『デスブーツ』と書かれた看板、靴型のジヨツキに赤いワインがなみなみつがれた絵が描かれている。その下には『おまえの死因はなんだ!』とかかかっていた。

キツチヨムはその看板を指先で軽く押した。看板は錆びついた鉄の音をたてて、ギシギシ揺れた。靴のジヨツキを照らし出すランプの光がゆれるとワインが波打つように揺れているようだ。

「これはユーモアか？」後ろで不思議そうにスタンが薄ら笑いを浮かべている。

「さあ……」キツチヨムは看板から目を離すと扉を押して中に入った。キツチヨムそっけなく返されるとスタンも口を閉じそれに続く。

広く大きな部屋は思ったよりも明るい。太陽の光を見ることができないからだろう、死人たちはありつただけのランプと蠟燭を灯しているのだった。

ここは死人たちが夜な夜な息を吹き返し集まってくる酒場『デスブーツ』だ。廃材で作られたようなお粗末なカウンターがあり、酒樽がつまれている。いくつものテーブルがひしめき合うなか天井からブランコがいくつかが釣り下がられている。一人乗り、二人乗り……。古ぼけたピアノに、たくさんガラクタ。酒場といっても廃材置き場のようだ。だがこれが彼らの世界だった。

彼らが行く場所はほかにはない。50人ばかりの死人たちは話をするものはもとより、トランプに興じるもの、歌を歌い楽器を弾くもの、演説かさながらに独り言をいつているもの、くるくるとダンスを踊るもの、足元には小さな子供もいる。隠れたり、走ったり、叫び声をあげたり…、騒がしいことこの上なかつた。しかし、死人たちは騒ぐこと以外することなどなかつたのだ。

入口に近いテーブルに座りちびちびとワインを飲む太った男が、キツチヨムとスタンが酒場に入るとすぐに気づき顔を上げた。

「スタン、遅いぞ！なにしてたんだ！？」席を立ち巨体を揺らしながら二人のもとへやってくる。

「デイブイ…。キツチヨムを見に行くつていつたる？」

「ちよつと見てくるつていつたんだ、アレグロの演説が終わるまでに帰つてくるつていつただろ？」デイヴィの指差す方向に黒いひげを蓄え胸に手をあて大声で叫んでいる男がいた。

「アレグロは詩人だよ」キツチヨムがそういうとスタンはその通りだといわんばかりにデイブイを見つめうなずく。

「それにだ、まだ演説終わつてないだろ、その…ドラゴンが私に火を噴きどうのこうのつてまだいつてるじゃねえか」

「アレグロは同じ話をなんども繰り返し返してる！僕が気付かないと思つたか？ドラゴンにケツの穴を溶接された話は、もう126回目だつ…！」

「数えてたのか…？」

「フフ、僕は馬鹿じゃないからね」

「そこまで馬鹿だとは予想してなかつたんだよ」

「なんだと！スタン、きみは外にでたんだ！！」デイブイがたまりかねてそう叫ぶと、酒場の音楽が止まり死人の青白い顔が一斉に入口の高い台に立つ三人の男を見つめた。

「おいおい、デイブイなにいつてんだよ。出てないよ、出るわけないだろ！」スタンが笑つてそういうと死人たちは耳に入った言葉をわすれて木製のジョッキを手を取った。楽器は快活な音を取り戻し、

叫び声が酒場にこだました。

スタンはほつと一息ついたが、三人の死人がスタンの言葉だけでは納得いかないらしく階段のもとへやってきた。

「ほんとだろうな…外にでてないって」死人が三人、スタンを睨み付けている。スタンは息を飲み、苦笑いを浮かべている。

真ん中の青白い顔をした男はオスカー・ゲイル。リサーチとフォックスという死人を二人従えてスタンリーを睨み付けている。やつれた顔にさらさらの白髪を真ん中でわけている。目は二重で男前だったがインテリを気取っているようなやさ男だった。

リサーチはスタンより背が高く体も大きかった。いつもゲイルの後ろに立ち人間だろうが、酒樽だろうがとにかく睨み付ける。大きな体だけが自慢の男だ。

フォックスは意地の悪そうな顔もそうだが性格も悪かった。いつもにやついているが、なにがおかしいのか周りの者にはわからないのだ。とにかくあの黒く汚れた歯と歯並びの悪さが不快だ。ゲイルの後ろに隠れて首だけ出してにやにやしているのだからたまったものじゃない。

「出でないよ、講堂で食い止めた」スタンの肩に手を置き死人の視線を引き受けると、キツチョムは自分の頬のミミズ腫れを指差して言った。みると目元も赤くはれて青あざができている。

ゲイルはキツチョムから目を離し、反応を確かめるようにスタンリーの顔を見た。スタンリーの顎の傷を見つけると鼻を鳴らしにやにや笑った。

リサーチの腕を軽く叩くとゲイルは満足そうにもといた席にもどっていく。残されたフォックスがニヤニヤ笑いスタンを見ている。

「二度死んでみるか？」フォックスの耳元でスタンプがそうつぶやくと慌ててゲイルのもとへ逃げて行った。しかし席に着くと脅されたことを忘れてしまったかのようににやにやと笑ってこちらをみている。

「チッ…！」スタンプが舌打ちをしてフォックスを睨んでいる。

「仕方ないよ、フォックスは頭がいかれてるんだ」デイブイがスタンの肩に手を置いて言った。「きつと後ろから後頭部を鈍器でおもいっきり殴られて死んだんだ、あ…そう、凶器は花瓶かかもしれない…いや、ああ！もしかしたら、死因は虫歯かもしれない。菌で頭がやられたんだ…、ああっ！！もしかしたら…」

「…名推理だ」スタンはデイブイの言葉をさえぎって「でもこれ以上は事件を複雑にするだけだ。やめたまえ」そういうと笑ってキツチヨムを見る。

キツチヨムは笑っていた。声は立てなかったが楽しそうに笑っていた。スタンは胸をなで下ろした。最近は昔ほど笑わなくなり、時々ため息をつく。そして酒場でみなを迎えるのが日課だったのに、デスダストの実験が忙しいのか、遅くることがよくあった。

「よし、ワインをいたかくか！」スタンはゲイルのことで礼はいわなかった。というのが照れ臭かった。代わりにキツチヨムの腕を力いっぱい叩いた。

キツチヨムは少し悲鳴を上げたが笑っていた。デイブイは巨体を揺らしキツチヨムの背後にまわるとその背中を押しながらこういつて笑った。

「お前の死因はなんだっ！！ははは！」

地下の宴 2

地下の宴 2

キツチヨムの前で木製のジョッキを軽々と持ち上げ、デイブイがワインを喉に流し込んでいる。喉元には分厚い肉がタプタプと揺れている。ジョッキをテーブルに叩きつけると酒臭い息をまき散らす。かなり酒がまわってきているようだ。

「美味だ！美味だよお…でも！でも！知っているかい、キツチヨム！」

隣で片膝を椅子の上に引き上げてワインと飲みながらスタンはちらりとデイブイを見た。キツチヨムは硬いパンを小さくちぎり口の中へ放り込みジョッキを握った。

「実際のところこのワインは美味だ。でもデスブーツがそう思わせてるんだ。生きてるときに飲んだオルス酒店のワインはこんなものじゃなかった！まるで、そう口の中でクルクルと回りながらいい女がダンスを踊っている。まさにそういった感じだ！」

「いまじゃどうなんだ？」あきれてスタンがいうと、デイブイはふと考えるそぶりをみせる。そして立ち上がったこういった。

「うん！舌の上で大量のノミが飛び跳ねているんだ！」

キツチヨムは口に含んだワインをぶちまけた。スタンはそれを見て大笑いしたがデイブイはそれ見たかとしたり顔だ。

「ほら、見たことか！そうだろ？キツチヨム」

「ちがうよ、君がへんなこというからだ…」キツチヨムは慌てて袖でテーブルを拭いている。

「ああ……ごめんよ」デイブイは巨体を椅子におろすと「ほら、あそこを見て。ソファで飲んだくれてる爺さんだよ」

キツチヨムとスタンがソファに目を向けるとひときわ大きいジョッキを抱いていびきをかいている老人がいる。壊れたソファに身を

うずめ、鼻から頬が薄く紫色になっている。生きている頃は赤かったのである。

「しってるよ、あれがオルスだ」スタンがそういってキツチヨムも頷いてみせた。

「オルス酒店のもと親方だ」デイブイはそういつと続けていった。「死の間際、町の奴らは親方に死人の免罪符を取らせたんだ。ワインの味を保つためだった。息子はまだ若かったからね。オルスは死んでからずっとそのカウンターの傍に立ち毎日テイステイングしてメモを取った、そして息子にブドウの配合はこうだ、塾生はああだつて手紙を書いたんだ」

「で、どうしてこんなノミが飛び回るような味になるんだ？」スタンは話の腰を折った。

「まあ、聞けよ、話し終わってないから……」デイブイは不服を表した目でスタンを見た。「味は日に日によくなっていった。季節が変わり新しい果実を収穫するところにはまた格段に味がよくなる。みんなテイステイングする親方を囲んでワインのうんちくに耳を傾けた、親方は演説さながらに講義をした。しかし、ある日を境にワインの味は変わらなくなった。それ以上に味は悪くなる一方だ。一人、また一人と親方のテイステイングに興味を失っていった……」

キツチヨムはちらりとソファに深くうずもれるオルスを見た。ただの飲んだくれかと思っていたが、そういう時期もあったのかと思うと少し哀れだ。デイブイの話はまだ終わっていないかった。腰をかがめテーブルに上半身を乗り出している。キツチヨムは机が傾かないように腕をテーブルに乗せ体重をかけた。

「オルスはテイステイングで味が悪くなっていくのが許せなかった。怒り心頭で手紙を書き、飲んだくれてはジョッキを壊すんだ。オルスがテイステイングする度にジョッキが壊れたんじゃ、みんなたまつたもんじゃないだろ？」

スタンはそらそうだとばかりに頷いて見せた。

「……うん、だからみんなだオルスのテイステイングを辞めさせたん

だ。そのかわりあの大きなバケツ…というかジヨッキを渡した。その日からあのジヨッキでノミのワインをがぶ飲み、カウンターじゃなくあのソファアールがオルスの居場所になった。まるで毎日死んだように…、毎日そう、まるで死んでいるかのように、いや、かなり死んでいるかの……。その…」

「わかってる、とつくに死んでる。死んでるけど、その、魂も失ったかのようだ」

「そう、そのとおり!!」デイブイは合点がいったかのように机を叩くと興奮して立ち上がった。「スタンの言うとおりだ!」

「まあまあ、いいよ、座れよ」スタンがデイブイの袖をひっぱり椅子に腰を落とさせた。「いまのはアレグロが使った表現を盗んだんだ」「そうか、そうだったのか?」デイブイは尊敬に似たような眼差しを遠くで何やら叫んでいるアレグロに向けた。そしてキツチヨムの顔に視線をうつすと「その、つまり、僕が言いたいのは、もつと上手いものが食べたくて…おいしいワインが飲みたい…」そういうとデイブイは肩を落とした。

キツチヨムはデスブーツを見渡した。寄進品を集めるのがキツチヨムの仕事の一つだ。しかし「寄進品」とは名ばかり、どれもこれもガラクタか、三級品、劣化版だった。このワインがいい例かもしれない…。

寄進品は町と教会との契約だ。何百年と続いてき経緯がある。この教会は町なしではやっていけないし、町もまた教会なしではやっていけないはずだった。しかしいつの間にか、この教会は、この墓場が…。町の人々のお荷物となっていた。

「わかってる、わかってるんだ…デイブイ…」キツチヨムはそういうとデイブイの肩に手を置いた。「…僕が何とかする…」

「おいおい、何とかするってどうするんだよ?!こればかりはどうしようもないだろう。デイブイと約束するなら食い物意外にするんだな」

スタンがそう言ったのを耳にかけるよう様子もなくキツチヨムは立

ち上がった。

「そろそろ部屋に戻るよ…」そういうとキツチヨムは立ち上がり、椅子に掛けてあったマントを手に取った。「デスダストを作らないと…」

「キツチヨム、金曜日には寄進品を集めに行くんだろ？」デイブイが子供のような目をキツチヨムに向けている。期待と好奇心が入り混じった目付きだ。

「ああ…」キツチヨムは笑って見せた。

「そうか、はは」デイブイが嬉しそうに笑っている。

「なんだ？そんなにうまいものが喰いたいのか？」三人が目を向けると、いつからそこにいたのかゲイルがカウンターに持たれてジョッキを傾けワインを飲んでいる。

「ゲイルだつて喰いたいだろう？」いぶかしげにデイブイがそう言う。とゲイルがキツチヨムのもとに近づいてくる。

「まともな寄進品なんてキツチヨムには無理だ、手に入るわけがないだろ。町の奴らはいいつのことを死人の使いだとか、悪魔の墓守だとか呼んでるんだからな。なあ、キツチヨム、町の奴とまともに話したことあるのか？」キツチヨムの顔にゲイルの酒臭い息が吹きかかる。キツチヨムはゲイルから目を離れた。事実、キツチヨムは町の人間とほとんど会話をしたことなどなかった。恐れられる以上にキツチヨムは町の人間を恐れているのかもしれない…。

「おまえは町の人間が怖いんだろ？ハハハ。凶星か？！」

キツチヨムのマントを握る手に力がこもった。

スタンは椅子を蹴り上げ立ち上がった。

「おっと！俺は親切でいつてやってるんだ。俺を誰か忘れたか？オスカー家のゲイル様だぞ？町一番の権力者だ！いいか、うまいものが喰いたけりや、うまい酒が飲みたけりや、このゲイル様に頼むんだな。頭を下げてお願いすれば…、そうだな、考えてやってもいい、ハハハハ！」そういうと高笑いをしてゲイルは自分のテーブルへと戻っていく。

スタンが後を追おうとするのをキツチョムが腕を握って引き留めた。

「おい、俺はもう我慢の限界なんだけどな……」スタンが腕を引き払おうとする。

「君もそう思ってたろ！？ 僕が町の人間を恐れてると……」

「……！」スタンは驚いたようにキツチョムを見つめた。しかしその通りだった。「そ、そんなこと……」そう言いかけながらスタンは視線を落とした。

「ほんとのことだ……」キツチョムはテーブルのジョッキを手に取り「僕は大丈夫だ」そういつて二人にジョッキを持つように促し、微笑んだ。

スタンはジョッキを手に取った。デイブイもそれに続いてジョッキを手に取り立ち上がった。

二人がジョッキを手にしたのを確認するとニヤリと笑いキツチョムは叫んだ。

「死者の胃袋に……！」これは飲み干せの合図だ。

スタンとデイブイは慌てるように「死者の胃袋に！」と声高にいうと一気にジョッキを傾けた。三人の喉元に大量のワインが流れ落ちていく。口元からワインが漏れ落ちていく……。三人はほぼ同時にテーブルにジョッキを叩きつけた。

「じゃあ、デスダストをつくるよ」

「ああ、頼んだぞ！ 俺たちはお前なしじゃ生きていけないんだから、な！ デイブイ！」

「そのとおりさ、僕の体はみんな二倍あるからデスダストもみんなの二倍頼むよ！」

「ああ……考えとく……」キツチョムはクスリと笑うと二人に背を向けた。

キツチョムが階段を駆け上がっていくのを二人は見届け、椅子に腰かけた。

デイブイはちらりとスタンを盗み見た。なにやら真剣に考え込んで

いる様子で言葉のかけようがない。かといってカウンターにワインを取りに行くのも妙に気が引ける。

空になったジヨッキの底をただただ覗き込んでいると後ろから後頭部をひっぱたかれた。

「いて！」

スタンがニヤニヤ笑ってディバイを見ていた。

「なにするんだよ！スタン！」

「お前は余計なことじゃべりすぎるんだよ！」

「ああ…ごめんよ…」ディバイが肩を落とすと、ジヨッキが目の前に二つ置かれた。

「いいから、はやくワインついで来てくれよ、夜は長いんだ」

「ああ！そうだね、夜は長い」スタンの機嫌が悪くないと思うとほっとしたようにディバイは笑みを見せ立ち上がり、カウンターへ急いだ。

スタンはぼんやりとディバイの巨体を眺めていたが、実のところキツチヨムのことでは頭がいっぱいだった。

4 バレル・ガードナーの名推理

バレル・ガードナー隊長のブーツがアルトの薄暗い部屋で音を立てている。ゴツゴツと不格好な音がタムズの耳に響いていた。アルトのベットに腰かけ頭を抱えるタムズの前をバレル・ガードナーは小一時間行ったり来たりしているのだ。彼はグレスデンの自警団の頭領である。胸を張り、ねじれた赤ひげを顎から耳元まで蓄えている。威厳を装ってはいたが傲慢さがにじみ出ている。質の悪い葉巻を口にくわえてもうもうと煙を出している。

「正直に言おう、タムズ」口元の葉巻を指に挟むと手に取った。口に残った煙を舌で押し出すと唇を舐める。葉巻の先の火種を眺めながら続けた「私はさきほどからおまえの言っていることがまったくもって信じられんのだ」

タムズは顔を上げた。涙を枯らした目は腫れぼったく力がない、まるまると太っていたタムズの顔はほんの数時間でげっそりとし、顔色が悪く白くなっていた。

「君は悪魔を見たといったな…。いると思うか？悪魔が…。じつはわたしは神さえも疑っている。このケルビム・サムに誓おうじやないか、断じて悪魔などおらん」バレル・ガードナーは膝に届くほど長いベストをめくり腰の拳銃に手をあてた。バレルの腰の拳銃は黒い犬の装飾が施してあり、犬の口から銃口が飛び出ている。

「わたしはケルビム・サムで仕留めることができる存在しか認めん…。そしてこの部屋に来てわたしが正しいことを悟ったのだ」

タムズは疲れた目を無理やり上げてバレル・ガードナーを見つめた。

小一時間前、タムズの部屋で話をしていたガードナーはタムズの話聞き終わると、アルトの部屋はどこだと言い出した。そして二人はアルトの部屋にやってきたのだ。そしてガードナーはベッドに腰掛けるタムズの前を赤ひげをなぜながら行ったり来たり…。そして

葉巻をつけたのだった。

「私の半分くらいの背丈で背筋の曲がった黒マントの男…、鉄の音を響かせ鳥のように空を飛び二軒先の屋根に飛び乗る。そしてそれは角を生やしている。…まさに悪魔だ。そうだったな」

タムズは力なくうなずいた。

「タムズ、ここから通りが見えるな。ちょうどこの張り出した屋根の下が店のドアだろう？」ガードナーが窓の下をのぞき見ると町の間人間がランプをもち集まってきている。自警団の団員が持つ松明が炎をあげてあたりを明るく照らし出し、集まる人々の顔を浮き上がらせている。ガードナーが窓から見下ろしていることに誰一人気が付いているものはいなかった…。そう、あのスプリング・ヒールド・ジャックを覗いてはだ…。

タムズの肉屋からそう遠くはない屋根の上に大きな煙突があった。煙突は月を背にして大きな暗い影を屋根に落としていた。その影の中にじっとスプリング・ヒールド・ジャックは潜んでいた。

彼が見ている世界は赤い幕で覆われている。ゆらゆら陽炎のように揺れ色を失っていた。黒は強烈な赤に反転し、白いものはうつすらと赤いだけだ。それは彼の目玉が炎でできているからだ。炎が燃え盛る音が耳鳴りのように鼓膜に響いている。昼間になれば日の光は彼の世界をただの白銀へと変えてしまうだろう。

タムズの店を遠くから眺めながら、町の人間の顔を見る。みんな赤く光る瞳をしている。窓の傍で男がなにか口を動かし言葉を発しているのが見える。

なぜそこにいるのか、スプリング・ヒールド・ジャックにもわからないでいた。ただ胸にうずくながここにいるよう彼に命じたのだ。彼はただ胸にうずく何かしらを抑えじつと我慢をしていた。

「アルトはこの部屋に一人だった…」ガードナーはそう言った。独

り言か、それともタムズに答えを促しているのか。タムズは何も言わずガードナーから視線を外し暗い床を見つめている。

「この窓から油を撒けば町の奴らは焼け死ぬだろうな……」
タムズは驚いたように視線をガードナーに向けた。

「この窓から外に出て、油を撒き火をつける。もしくは火のついた油をぶちまけるか……。まあ、どちらにしても簡単なことだ」

「ああ、あなたはなんて恐ろしいことを……」タムズの手がきつく握りしめられた。ガードナーは構わず話を続ける。

「アルトが近々結婚するということのような噂があるな、しかしだ、わたしはあのマゴニーが許すとは思えん。アルトの母親がわり、いまだはこの店の女主人といってもいい。アルトほどのかわいい女性ならば他に良い縁談があるうちに、靴屋の使用人とはな……。まあ、ただの噂だ」

「マルゴーに式の話をした……マルゴーは頷いて見せたんだ！式を挙げることを承諾したんだ！お前に何がわかる！」タムズはたちあがり声を荒げた。

「おっと、そう大声をだすな……。マルゴーが生きていればその口から聞かせてもらおうじゃないか」そういうとドアを見るとばかりに顎を動かす。

そこにはウイリアム・ブロディー医師が立ち尽くしていた。丸い眼鏡をかけ高い鼻、優しく聡明な男で微笑みを絶やさぬ男だ。だがこのときはばかりは暗い顔をしていた。丈の長い薄手のコートを着ている。大きな黒い革の医療用バッグを手に持ちタムズが大声を上げているのを目を丸くして見ていた。

タムズはブロディー医師に駆け寄ると両手で彼の肩をにぎりしめた。喉から言葉を吐き出させるように激しくブロディー医師の体を揺らした。

「マゴニーは、マゴニーは無事なのか！？」

「ええ、命はなんとか……」強く肩を握るタムズの腕にブロディー医師はやさしく手を置いた「……ですが、顔のほうは……わたしにはどう

しようもない……」

「……も、もどらないのか……」わかっていたことだった、タムズは焼けただれる娘の顔をこの目で見ていたのだ、唇は見当たらず、奥歯が一部はみ出していた。いたるところ血がにじみ出ており、肉から皮がはがれ落ちていた……。

タムズはブロディー医師の前に跪き、嗚咽を上げ始めた。

ブロディー医師は部屋に入りながら、襟元のボタンを外し首筋を軽くした。ため息をついてベットに腰を下ろした。

「タムズさん、少々残酷だが、聞いてほしい……」そういうとタムズの背中を見つめ話を続けた。「彼女の唇は、上唇も下唇もわからないほどだった……かろうじてメスを入れたが……喉も焼けている。正直、言葉を離せるか……話せてもいままでのようにはいかないだろう……」ブロディー医師は大きく呼吸をして背筋を伸ばした。「目は、もう見えない……」

タムズが床に頭をぶつけ泣き叫ぶ声が響きわつ立った。町の人も階下にいた自警団も2階に目を向けずにいられないほどの叫び声だ。

ブロディー医師は立ち上がり、タムズの背中に歩み寄り膝をついた。そして肩に手を置いた。

「タムズさん、そのように大きな声を出してはいけません……。マルゴはまだ気を失っています……。眠っているんですよ。あなたが気をしっかり持ち、マルゴとアルトを支えなければ……」

タムズは唇を閉じ嗚咽を押し殺した。喉の筋肉が顎の骨をきつくしめつける。目をきつく閉じ、あふれ出る涙を力づくで押さえつけようとした。

「……この町の中でも稀にみる美しい女だったんだがな……。」「ガードナーがそういと、タムズはブロディー医師の腕を振り払いたちあがった。ガードナーに駆け寄り襟元を掴むと窓の備え付けられた壁に背中ごと後頭部を叩きつけた。

「お前に！お前になにがわかる……！」

ガードナーは後頭部の痛みに顔をゆがめている。

ブローディー医師は立ち上がり、タムズとガードナーに駆け寄り「タムズさん、落ち着いて！」タムズの腕をきつく掴むとガードナーを睨み付けた。「あなたも口がすぎますよ！！」

「ああ…」そういうと両腕でタムズの力を失った手を振りほどいた。タムズは床に崩れ落ちた。

「…すまなかつたな、口が過ぎた」

そう口にするガードナーの耳に馬のひづめの音…馬は店の前でとまり鼻を鳴らしている。ガードナーはちらりと外を見た。馬上から飛び降り地に足をつけた若者は肩まで伸ばした美しいブロンドの髪をもっている。

「おっと…グレスデンの王子様のお出ましだぞ…」ガードナーは軽く舌打ちをした。

「ブローディー…」ガードナーはブローディー医師を見た。ブローディー医師が頷きタムズに寄り添うのを確かめると靴音を響かせて階下へ向かうのだった。

5・グレスデンのおとぎ話

狭い廊下の先に階下へ降りる階段の降り口があった。その傍に自警団の若者が一人たっている。自警団おそろいのチョッキを着て、白く硬い帽子を被っている。ガードナーが廊下に姿を見せると背筋を伸ばした。

「いかがでした…？」ガードナーが階段に近づいてくると男は興味深げに聞いた。

「カール…」カールと呼ばれた男は細身の男で、気の弱い臆病な男だったが、ガードナーのそばにいるときは胸を張り偉そうにしている男だ。帽子に一人だけ黒いカラスの羽をつけ自警団副隊長を自負している。

「…アルトは？」

「ええ、下にいます。ほら…」

ガードナーは階段の降り口までやってくると階下を見た。アルトは階段の一番下に腰かけ縮こまっている。タムズの叫び声が聞こえすっかり怯えてしまったのだろう。両手で硬く耳を抑え振るえており、泣いていることは容易に想像できた。

カールはガードナーの目を見つめ答えをじっと待っている。

「いまにわかる…」そういうとガードナーはカールの肩に手を置き引き寄せ、耳元に口を近づけた。「いいか、アルトから目を離すんじゃないぞ…」

カールはキョトンとしていたが、慌てて背筋を伸ばすと敬礼をした。

「わ、わかりました！」

「うむ。」ガードナーは頷くと階下へ降りていく。カールも慌ててガードナーに続いた。

しゃがみ込むアルトの体を避けてガードナーは床に足をつけた。

アルトに一瞥されると入口へ向かう。扉は開け放たれており外に馬

の首筋を撫でている金髪の男を見つけた。男はロウガン・ハン・オスカー。この町の長、モンスリー・ハン・オスカーの一人息子。そしてご存じ、死人ゲイルの甥である。おそらくゲイルが死んだのはこのくらいの年ごろなのだろう。長い睫に、深い二重の瞼。ゲイルの血がその体に流れているのがそれとわかる顔立ちをしている。

ロウガンはガードナーを見ると自警団の一人に手綱を握らせ、招いてもいないのに堂々と入ってきた。そしてガードナーと言葉を交わす前にうづくまっっているアルトを見つけ駆け寄った。ガードナーは出かけた言葉を飲み込んだ。ロウガンはアルトの前に跪き肩に手を置き呼びかけた。

「アルト！アルト！大丈夫か？！」

ロウガンが声を発すると耳を塞いだ手にさらに力を込め、アルトはひたすら頭を振るのみだった。

「かわいそうに……」そういうと立ち上がり、ガードナーのもとへやってくる。さりげなく手を差し出し握手をもとめてきた。ガードナーは思わず手をにぎる。この男お得意のパフォーマンスか……ガードナーは思った。

「うん……、たいへんなことになったな……」満足げに頷くと、ローガンは後片付けが放り出された店の中を見渡した。肉も皿も全部放り出されたままだった。気の桶が足元に転がっている。肉の周りをいっぴきのハエが飛んでいる。ガードナーを従えローガンは胸をはり腰に手を置いている、店の中を見渡す姿はまるで自分が主役だといわんばかりだ。

「ええ、ミスターローガン……」ガードナーは仕方なくその芝居にしたがった。

「すみません！通してください！！」

ローガンとガードナーは野次馬に首をむけた。人込みはどうやらその数をどんどん増やしてるらしかった。人込みが波のように揺れている。声を上げるものが誰か悟るやいなや人込みは慌てて道を作

った。

やわらかい黒髪を短く切っている頭が人込みをかき分けていた。開いた道にその姿を現すやいなや店の中に駆け込んでくる。

「アルト!」

ハンソン・フランクだった。

ガードナーがそれがフランクだと気づいた時にはすでにアルトに駆け寄り抱きしめていた。

「アルト!アルト!」

アルトはかたくなに耳を抑えている。フランクはその手を握りなれども叫んでいる。

「アルト!僕だ!どうしたんだ!?!なにがあつた!?!」

アルトはゆっくりと顔をあげる、目の前の男を乱れた髪の間隙から覗き見る。頑なに耳を抑えていた手が激しく震えている。

「ああ……」アルトは手を伸ばす、しかし手の震えはさらに大きくなる。いつぼうだ。泣きはらした瞳からさらに大粒の涙があふれ出した。たまりかねたようにフランクに抱きつく。アルトは大声を上げて泣き出した。

フランクはアルトをきつく抱きしめ「大丈夫、僕がそばにいるだけ?大丈夫だから……」そういいながら頭を撫で、乱れた髪をなおしている。

「さあ……こんなところに座り込んでちゃだめだ……」そういってフランクはゆっくりとアルトを立たせた。アルトもそれに従うのだがフランクの胸に顔をうずめている。離れることはできなかった。やさしくアルトの体を抱き寄せながらテーブルの傍に寄り、椅子を引き寄せ座らせた。

自警団の一人が気を利かせて肉を載せた盆を持ち店の奥に姿をけした。

アルトはフランクに体を預け顔を両手で覆い泣いていた。

「フランク、わたしが、わたしがいけなかったの……」アルトはそういってフランクの二の腕を強く掴んだ。

「な、なにを言ってるんだ、君のせいなんかじゃない。悪いのはマルゴーにひどいことをしたやつだろ？君がなにをしたというんだ？」
「何もしなかったの！お客さんが来たと思っただわ。私知っていたのよ、誰かがドアを叩いたのを…でも私、知らないふりをしたわ。お客さんの相手は私の仕事なのに！わたし…姐さんの顔なんて…顔なんて…」見たくない！…そう思った。だがそのことを口にするのができなかった。姉の焼けただれた顔が脳裏を横切る…。アルトはまた大声を出して泣き出してしまった。

ローガンはガードナーの背中を押し、外に出ようと促した。

入口に立った二人は松明の光をその体につけている。まるでガードナーは舞台上に上げられた気分だった。

「マルゴーは…大丈夫なのか？」マルゴーのことを思いやって聞いているのだろうか？ガードナーは興味のある野次馬の視線を感じた。

「ええ、命に別状はないと…」ガードナーは言いずらそうにうつむいた。

「そうか、それはよかった。安心したよ」ローガンは笑みをみせた。「美しい女性だからな、なに、今回のことは少しヤケドを負ったよ。うなものだな」

ガードナーは違和感を感じた。あまりにローガンが楽観的だったからだ。彼は馬鹿ではない。念には念をいれる。何事も慎重をきずる男ではなかったか…。

しかし、安心したのか野次馬の中には笑みを浮かべるものもいた。

「いえ……」

「ん？…どうした？」ローガンの目が話をしるとガードナーに訴えかけている。

「顔を焼かれましたよ、生きていますのも不思議なくらいです…」

それを聞いたローガンは言葉を失った。野次馬もまた同じだった。

ローガンは手で顎を撫ぜた。

「…悪魔…悪魔の仕業らしいな…」怒りにみちた低い声だ。だがその声は集まった野次馬たちの耳に届くのには十分だった。

なにを馬鹿な…。そう思ったがローガンの顔を見てその考えを捨てるべきだと思った。バレル・ガードナーの性根は腐っていたのだ。そして彼の腐った性根が彼にそう思わせていた。

「ええ…」ガードナーは無意識にそう答えていた。

野次馬たちはいちおうにざわついた。悪魔だなんて…。こわいわ…。そういった声がかしこから聞こえてくる。

「われわれのおとぎ話が現実になったわけだ…」野次馬のざわつきがさらに激しくなった。

ローガンは野次馬を見渡した。野次馬は目に恐怖の色を浮かべてローガンを見ていた。この瞬間、野次馬は聴衆へと変貌していた。

「わたしたちは幼い頃から恐ろしいおとぎ話を聞かされてきた…」聴衆の中の一人の男がその通りといわんばかりに頷くのを確認するとローガンは軽く頷いてみせた。

「うん…なにか悪いことをすれば、夜布団に入るのをいやがれば、やつはやつてくると聞かされた…：われわれの目を焼き、胴体からこの首を切り離すために！」ローガンはまるで聴衆を脅すかのような声を荒げ、怯える顔を見渡した。「終わらせるんだ…」低い声が聴衆の胸に響く。聴衆は息を飲んだ。

「終わらせるんだ…このおとぎ話を！」

バレル・ガードナーはローガンの言うことの意味が分からないでいた。いやわかりたいとも思わなかった。しかし、ガードナーはいぶかしげに眼を細めると、聞かすにはいられなかった。

「終わらせるとは…、その…？」

「墓守だ…」

聴衆はざわついた。『ハカモリ…』という囁く声がかしこから聞こえてくる。

「墓守を…地獄へ送りかえすんだよ」

ガードナーは驚いたようにローガンを見た。そんなことをしてなんになるのだ？　そう言おうとした。しかしその言葉を飲み込んだ。いや、彼の腐った性根がガードナーに言葉を飲み込ませたというべきである。オスカー家の跡取りに意見して得なことなどあるだろうか……？

「われわれの手で恐怖のグレスデンのおとぎ話を終わらせ、子供たちに勇気と安息を与えるおとぎ話を聞かせてやるうじやないか！！」
ローガンは足を踏み出した。まるで舞台にたち聴衆をあおるように拳をかかげ歩きながら叫んでいる。聴衆の目はローガンにくぎ付けになり、首がローガンの姿を追っている。

「ここに誓おう、わたしローガン・ハン・オスカーとそこにいるバレル・ガードナーは必ずや墓守を地獄へ送りかえしてやる！！」

「……！！」指を差され突然やり玉にあがった自分の名前にガードナーは驚き、あやうく声をあげそうになった。しかし聴衆の驚きと期待の入り混じった瞳の輝きに居住まいを正す以外に道はなかった。「ほかに、わたしたちに手を貸してくれるものはいるか！？」聴衆に問うローガンの声は力強かったがすぐに手を上げようというものは出てこない。顔を見合わせお互い牽制している。手を上げようとする男の肘を掴み首を振る女性もいる。

ローガンは鋭い眼光を聴衆に向ける。聴衆は首を縮めて押し黙っている。ローガンの目がドアの近くにたたずむ自警団副隊長のカールを見た。カールは目を丸くして背筋を伸ばし、おそろおそろ手を上げた。

ローガンはカールの手を取り手を力強く握った。「君は勇気があるな」そういうと賞賛の微笑みをカールに向けた。

カールは胸を張ってうなずいた。まるで重大な任務を請け負ったかのように緊張が背中を走った。

カールの握った手を離すとさらに聴衆に目を向け、口を開こうとしたその時だった。

「わたしがお手伝いします！」

ドアの中からハンソン・フランクが歩み出てきた。怒りに満ちた目をしている。思いつめたような表情には硬い決心がにじみ出ていた。

「わたしにも、手伝わせてください…」そういうとフランクは聴衆の前に立った。

聴衆の目がフランクにくぎ付けになる。ガードナーはその緊張感の中、不敵な笑みを浮かべる人間を見た。ほかならぬローガン・ハン・オスカーだ。

役者がそろった。ガードナーはそう思った。以前町にやってきた旅芸人の芝居で同じ感覚を覚えたことがある。芝居の中でここぞという時に出てくる登場人物。その人物が出てくるときの観衆の気持ち。否応なく物語に引き込まれる観衆。あとは幕が下りるまで彼らは芝居の虜となる…。

しかし、ローガンは不敵な笑みをかき消しこういった。

「きみが？フランク、君はアルトのそばについてあげなければ…」

「いえ、僕も手伝います。アルトは僕の恋人だ。僕にとってマルゴは家族も同然…どうしても許せないんだ…」そういうと店の中で肩を落とすアルトをちらりと見た。「僕は彼女を守りたい…。傍にいたい…。でも、もしも戦うことで彼女を守る道があるなら、僕は迷わない…、戦います」

聴衆から鼻を鳴らす音が聞こえた。女が顔を隠し涙を拭いていた。誰もが声を上げずただその場に立ち尽くしている。

「ああ…！」そのなかローガンが声を上げた。「まさにわたしもガードナーも同じ気持ちなんだ！！君は家族を！わたしたちはこの町を！！命をかけて守ろうじゃないか！！」

ローガンはフランクのもとに歩み寄りフランクを強く抱きしめた。そして、一人また一人と手を上げていく…。もう彼らの肘をひっぱり引き留めるものはいなかった。町の人間は虜となっていた。ローガンはまんまと観衆を舞台に引き上げたわけだ。

民衆とは愚かなものだ……。ガードナーは心の幕を引き下ろした。もうローガンの民衆を煽る声も、騒ぎ立てる野次馬の声もどこか遠くから聞こえてくる雑音のようだった。ただ月の周りに浮かぶ黒雲が風に流されていくのをぼんやりと見ていた……。

もしも、バレル・ガードナーの意識に考える力が残っていれば、遠い屋根の上、煙突のすぐ真下に二つの赤い光を見つけ、それがなんでいるか確かめようとしたであろう。蠟燭の光よりも赤く輝くその光を視野にとらえながら、バレル・ガードナーはそれを見逃していたのである……。

6・白い霧の中で - ガードナーの家路 -

6・白い霧の中で - ガードナーの家路 -

辺りに深い霧が漂い始めた。煙突の陰に隠れているスプリング・ヒールド・ジャックは町の人々が去って行くのをじっとみていた。彼らが姿を消したあと、いくつかの通りの角から白い霧がスプリング・ヒールド・ジャックのもとへ流れてくる。夜はもとの静けさを取り戻す。彼の呼吸は荒くなり始めていた。

自警団隊長バレル・ガードナーは家路の途中であった。ほんの一時前から足元に深い霧がまとわりついてきた。突然霧が発生するのはこの夜で2度目だった。いまや彼の後についてきているのは、副隊長のカール一人である。

「不気味ですね…」カールは霧を蹴り上げながらガードナーに話しかけた。霧が吹きあがり、渦を巻いている。

ガードナーはいぶかしげにカールを見た。

「そうか…？ただの霧だ」

「そう、そうですね…」自分が臆病風に吹かれているものとガードナーに思われたくはなかった。彼は腰のサーベルを抜いた。月の光が反射した。「私は明日このサーベルを鍛冶屋に持っていき、手入れをするつもりです。墓守を地獄へ送りかえしてやる！！」そういうと足元に揺れる霧に切りつけた。空を睨み付け奇声を上げてサーベルを振り回した。

「お前は俺の言ったことを覚えてないのか？」ガードナーがそういうとカールはサーベルを構えながらキョトンとした目をガードナーに向けた。

「と、いいますと…」

「まずは、その物騒なものを腰におさめるんだな…」

「ああ……！」カールは慌ててサーベルを鞘に戻した。

「いいか、俺はアルトから目を離すなどいったんだ……」

「はあ……、そうでした。しかし、墓守は……」

「お前が町の奴らの茶番に付き合う必要はない」

「はっ……！」そういわれてカールは胸を張った。自分は町の間人とは違う特別な存在だといわれているような気がした。

「お前は墓守のことをどう思っている？」カールはガードナーの横顔を見た。何か考えているのがわかる。なんだか遠くを見ているのだ。

「はあ……悪魔……」そういいかけてカールは言葉を飲み込んだ。悪魔はおそらくケルビム・サムでは打ち殺せないであろうからだ。「実のところ彼らは……犯罪者です。凶悪な……」

「そのとおりだ」

カールはほつと胸をなで下ろし、言葉をつづけた。

「あるものは海賊の頭領だったと聞きます。ケルト海を死体で埋め尽くし陸を作った。そしてあるものは金で人殺しをする暗殺者だったと聞きます。老若男女、彼はチェスをするように人殺しを楽しんだと……、そして今の墓守は人肉を食し、血をワインのように飲んだと聞きます……」

「そうだ、その通りだ……。しかし、人肉を食し、血をワインのように飲んだという男は、先代の墓守だ……」

エギオン……。その名前を口にしかけたが、ガードナーはやめておいた。エギオン、その名前は忘れようとしても忘れることはできない名前だ……。

暗い町の路地をまだ若いバレル・ガードナーが息を切らせて走っていた。モジャモジャの髭はまだその顎にはなく、赤毛は白い帽子で隠されていた。当時、彼は副隊長だった。いまのカールと同じように白い帽子にカラスの羽をつけていた。そして腰にはケルビム・サム。年老いた隊長が若くたくましい彼に託したものだ。若い

ガードナーは誇らしかった。毎日ケルビム・サムで悪人を仕留める自分を想像して楽しんでいた。

彼はコソ泥を追っていた。痩せこけた男はパンを握りしめ路地を右に曲がり、左に曲がり逃げ道を必死で探している。しかし路地裏は彼の前に高い壁を置いたのだ。行き止まりだった。

ガードナーは足を止めた。ケルビム・サムの導火線に火がついていた。ガードナーの胸が高鳴った。ケルビム・サムに火をつけたのはこれが初めてだった。銃口をコソ泥に向ける。

「パ、パンを盗んだだけだろ……」男はまだ若い男だ、少年のようにも見える。

「それはなんだ？」ガードナーは男のもう一方の手を顎で示した。

「これは……肉だ。パンと肉を盗んだんだ……」

「りっぱな泥棒だぞ。あと5秒ほどだ……ほかに言い残すことはないか？」

ガードナーはこの時をどれほど待ち望んだことか、いまや導火線は火薬に火をつけようとしていた。

「僕は！僕は……」慌てて男は口を開いた。

その時だ、ケルビム・サムが口から火を噴いた。凄まじい音が路地に響き渡り、ガードナーの腕がはじけ飛んだ。ガードナーが宣告した時間よりも2秒ほど早かった。

男は下っ腹に風穴を開け吹き飛んだ。行き止まりの壁に体をぶつける壁にずるずると背中を擦り付け倒れ込んだ。風穴から白い煙が立ち上っている。

ガードナーはケルビム・サムに触れ銃口に施された犬の装飾を興奮した目で見つめた。ケルビム・サムに触れると熱を帯びている。あたりに硝煙のにおいが立ち込めている。叫び声をあげたいという衝動を必死に抑えながら、くつくつと肩で笑った。

「僕は……僕はソルマントの死人なんだ……」

男の声が聞こえた。振り向くと男はいつの間にか立ち上がっている。胸に空いた風穴に指を突っ込んだり撫でてみたり、不思議そう

に眺めている。白く立ち上る煙を両手で振り払う。

「僕はソルマントの死人なんだ…」男はそういうと慌てて道に落ちているパンと肉を拾い上げた。「これ、返すよ…悪気はなかったんだ…」そういうとガードナーの足元から少し離れたところにパンと肉を並べておいた。「もう、帰らないと…墓守にみつかったらきつとひどい目に合わされる…」

ガードナーは怒りに震えた。まだ熱いケルビム・サムを握りしめ、いいようのない怒りに震えている。それでいて何も言葉が出ない。

死人はガードナーがなにも言わず、怒りに震えているのを見ると反応を見るように笑った。しかし笑みは帰ってこない。男は肩を落とすと「ごめんよ、脅かすつもりはなかったんだ。ただ、外にでたかったんだよ」そういうと駆け出そうとした。

しかし次の瞬間、男は後ろに体をのけぞらし吹き飛んだ。男は細く長い悪魔のような腕に後ろの襟首を掴まれ引き戻されたのだ。ガードナーが見たものは黒く長い鉄の棒。先が三つ又に分かれグニャリと曲がっている、まるで悪魔の手首がついているようだった。吹き飛んだ死人を黒く大きな影がしっかりと受け止めた。

「エ、エギオン…！」

背中黒い影を首をねじり見上げて男は声を上げた。エギオン…たしかにそう言った。いつの間にそこに立ったのか、ガードナーは全く気付かなかった。ガードナーは影を睨みつけたが心の中は恐怖に支配され、言葉を発することができない。黒く大きなマントをはおり、フードを被った男の顔はよく見えない。ただ顔に大きな傷があるのがちらりと見えた。

「度が過ぎるな…クロード」

「ご、ごめんよ…。ただ外に出たかったんだ。うまいものを食いたかったんだよ」男はそういうと道に置かれたパンと肉を指差した。

黒い男が深いため息をついたのがガードナーにはわかった。

「すまなかつたな…。驚かせたか…」男の声は意外にも優しい響きを伴っていた。軽々と死人をわきに抱えると「その、黙っていてく

れるか？このことをだれにも話さないでほしい……」

ガードナーはただ頷いた。いやだとは言えなかった。黒い影から感じられる威圧感がガードナーから言葉を奪っていたのだ。

「そうか……」男の口元に笑みが浮かぶのがちらりと見えた。ぶらりと力なくうなだれていた死人が顔を上げガードナーに笑みを向けた。ガードナーと目が合うと嬉しそうに手を振って見せた。

大きな影が体を動かすと、ガードナーは後ずさったが、とっさに手を上げ影に向かって指をさした。

「いいか！だ、黙っててやる！」大きな声を出したが、指先から腕にかけて激しく恐怖で震えている。その声を聴いて男は固まったが、ガードナーはかまわず続けた。「その代り、二度と！二度と死人を外へ出すんじゃない、一歩たりともこの町に近づけるな！！」それがガードナーの精いっぱいだった。素晴らしいがらいつ腰を抜かすかと不安で仕方なかった。

フードが動き、男の顔が露わになった。顔に大きな傷のある男だ。しかし、ガードナーを見つめる目はどこか悲しげだった。

「わかった……。約束しよう……」そういうと男は地面を強く蹴り飛び上がった。壁を蹴って屋根を掴むとひらり体を反転させて屋根の上に飛び乗った。死人をわきに抱えて軽々と屋根に飛び乗ったのだ。ガードナーはその機敏な動きに目を奪われた。

男が姿を消すとケルビム・サムを見つめた。腹の底から怒りが湧きあがる。

「わたしは絶対に認めない……。ケルビム・サムで仕留めることができないうものなど……」

ガードナーが腰に収めているケルビム・サムを握りながら何か考えているのをカールは不思議そうに眺めている。

「あの、墓守がどうかしたんですか？」

ガードナーは我に返った。カールの顔を見ると再び歩きながら話を始めた。

「彼らはその罪を償うために生涯を死人にささげた者たちだ。決して許されぬ罪だ…決してな…。だが、今の墓守は少し事情が違う。お前も噂くらいは聞いているだろう」

「ええ、もちろん。その…孤児で、幼いころから教会にいたということくらいは…」

「なにか罪を犯したのか？」

「はあ…、小さいころから町に姿を現してはよくものを盗んだり…。それくらいですかね…」

「そんなところだな…」

ガードナーの言葉を聞きカールはほつと胸をなで下ろした。

「われわれは自警団だ、町を守らねばならん。そして誰よりも現実的でなければならん。噂以上に大事なものは、自らの勘と思考だ。わかったな？」

カールは目から鱗の思いだった。この瞬間自分はまた一つ賢くなったのである。そしてカールは歩みを止めた。

「わたしはこれから行くところがありますので！」

ガードナーは足を止め振り向くと、笑みを浮かべカールを見た。

カールは敬礼をすると足早にもと来た道を戻っていった。

墓守か…。不意にエギオンの悲しげな瞳が頭をよぎった。それだけではない、今まで見たことのない記憶、忘れていたのだろうか…。グロード…死人だ。やつは屋根の上に運ばれようとするときもガードナーを見つめていた。悲しそうな瞳に涙をためて、さみしげな表情が記憶の中でクローズアップされた…。

ガードナーは笑った。死人に涙など…。そうつぶやくと記憶を消し去るように頭を振り、また歩きはじめた。

6・白い霧の中で - 鉄の爪 -

長く伸びる煙突の影の中に姿を隠していたスプリング・ヒールド・ジャックは月の光のもとへ歩み出る。通りは揺れる霧が漂い流れて川のようなのである。屋根を踵で踏みつけると一足とびにタムズの家の窓の下へ飛んできた。壁に両手をつけてまるで蛙のように張り付いている。

突き出た屋根の上を音もなく動きながら窓のそばにやってくると中を覗き見る。アルトの部屋だった。

アルトの部屋には誰もおらず。乱れたベットがあり、窓のすぐそばにテーブルがあった。ドアが開け放たれており薄暗い廊下が見える。スプリング・ヒールド・ジャックの赤い視野にもそれがしつかりと見てとれる。

廊下が微かに色を変えた。ランプのほの暗い明かりが近づいてきていた。スプリング・ヒールド・ジャックは一度身を隠すところどは慎重に中を覗き込む。ランプを持った女がドアの前でふと足を止めた。スプリング・ヒールド・ジャックはその身を引いた。ドアが閉じる音が聞こえた…。

それと同時につま先をたてるとドアの前を通り過ぎる。片手で体を支えながらも素早い動きだ。壁づたいに進む。隣家とタムズの家との暗い隙間に潜り込んだ。そこにも一つ窓があった。真つ暗な部屋だった。スプリング・ヒールド・ジャックの炎の瞳には女がベットの上で眠っているのが見えた。スプリング・ヒールド・ジャックは息を荒くした。そして窓に触れようとした時だ。ランプを持った女が扉を開いた。スプリング・ヒールド・ジャックは壁に背をつけ、息を殺した。

部屋に入ったアルトはマルゴーを見た。寝息が聞こえてこない、ほんとうに眠っているのだろうか…。ランプをテーブルに置くとべ

ツトの傍の椅子に腰かける。あるとはマルゴの胸に手をあててみた。たしかに胸が上下して呼吸している。胸から手を離すと口元を抑え、嗚咽が漏れるのを防ぐ。目から涙があふれ出ていた。涙はどうしても止めることができなかった。

マルゴの顔は包帯で隠されて全く見えなかった。美しい艶を放っていた鼻筋がいまは異様に低くなっていた。口元にかすかに隙間がありそこから息をしているようだった。包帯は赤い血が全体ににじみ出ており、ところどころ乾いて黒く変色している。

ふとアルトは目を上げた、そこにタムズが立っていた。タムズは黙ってアルトのもとへ歩み寄る。タムズの体に顔をうずめ肩を揺らしてアルトは泣き始めた。

スプリング・ヒールド・ジャックはドアの傍で喉を掻きむしりくぐもった低い声を出し始めた。喉が苦しいのだ。頭を抱え天を仰いだ。口から白い煙が立ち上がり始めていた。まるで逃げるように暗い路地へと姿を消した。

スカートを激しく揺らし女は家路を急いでいた。広い通りに漂う霧を足で蹴るように歩を進めた。夫が夜遅く出て行ったことをいいことに、子供を急いで寝かしつけると自分は男の家へとしげこんだのだ。若い男はいつになく彼女を引き留めた。まさかこんなに遅くなるなんて思ってもいなかった。楽しい時間はすぐに過ぎ去るものなのだ。

大変なことが起こったと夫はいつていた。夫は自分の仕事の傍ら町の自警団をしていた。大変なこと…。もしかしたら、夫は朝まで帰ってこないかもしれない…。女はそう期待しつつも必死に言い訳を考えていた。

しかし、そんなことを考える必要はなかった。女の耳にはあの鉄の音が響き始めていたのだから。

スプリング・ヒールド・ジャックは屋根を捨てると女の前に降り立ち行く手を阻んだ。女に背を向け地面にかがみこんでいる男が手元で何かいじくっている。鉄の音…女は地面にかがみこんでいるその男が大きな知恵の輪で遊んでいるように見えた。男が小さくなにか言ってるのが聞こえた「アイアン……アイアン……」

アイ…アン…？声をかけようにも言葉が思い浮かばない。小さな男だ。子供のいたずらだろうか…。

男がその顔を上げた瞬間、女の背筋が凍った。男の顔はこの世の者の顔ではなかった、醜い角が生えていた。赤く光る瞳…。男はまるで女に玩具を見せるようにその手を見せた。指先には鉄の爪がついていた。いたるところ欠けておりまるでのこぎりの刃のようだ。そして錆びついている…だがそれは錆びついているのではない。黒く乾いた血がこびりついているのだ。

女は悲鳴を上げた。その叫び声は路地に恐ろしいほど響き渡った。

自警団副隊長カールはタムズの家に引き返しているところだった。霧がさらに濃くなっていた。靴の中までじつとりと濡れるほど濃い霧だ。足を止め不快な足元に目を向けた時だった。通りに女の悲鳴が響きわたった。耳を疑うほど恐ろしい悲鳴だった。カールは一瞬身を縮めたが、その悲鳴はずっと続いている。

カールは辺りを見渡した。どの路地からも聞こえてくる気がする。世界がぐるぐると回る。やみくもにカールは走り始めた。悲鳴を耳に聞きながら、激しく高鳴る鼓動を胸に感じながら…。

女の服はズタズタに引き裂かれ道に散らばっていた。霧がゆれるとそのクズきれが霧の隙間に見え隠れする。服を身にまとっている女の裸体がずるずると霧の中を引きずられ路地裏に消えていく…。髪をつかみ重くなった女の体をスプリング・ヒールド・ジャックは引きずっていた。傷だらけの体から血が流れ出していた。女はもう悲鳴をあげることができなくなっている。すでに女の首は深くえぐ

られそこからドクドクと音を立てて血が流れ出ていた。

スプリング・ヒールド・ジャックは振り向き女をみた。黒目の上を向き、唇がガタガタを揺れている。その口元から泡のように血が湧き出しはじめた。

スプリング・ヒールド・ジャックは女の髪を離した。力なく女の頭が地面に落ちる。

低いうなり声が路地裏に響いた。頭を抱え込むと口元から恐ろしいほどの煙をスプリング・ヒールド・ジャックは吐き出し始めた。目の炎はさらに明るくひかった。

喉を抑えると口から凄まじい音とともに炎を吐き出した。女の髪は一瞬にして黒く焼け焦げ吹き飛んだ、体がねじれ関節が異様に曲がった。死んでいるはずの体が生き返ったように動いている。

女の体が静かになるとスプリング・ヒールド・ジャックは膝を地に落とした。

うめき声をあげ立ち上がる、壁に手をあて体を支えると踵を地面に激しくたたきつけた。

カールは広い通りにでた。揺れる霧のなか妙な音が聞こえる。何かを引きずる音…。足元の霧の隙間に引き裂かれた布切れが見える。カールは膝をつきその一枚を手にとった。赤い血がついていた。

耳に聞こえる奇妙な音に耳を傾けあたりを見渡した。黒いなにかが少し離れた路地にずると入り込んでいく。誰かが腹ばいになり道を這い進んでいるように見えた。膝下の部分だけが見えた。しかし這い進んでいるのではないのはすぐに分かった。つま先が上を向いている。引きずられているのだ、何かが路地裏に人間を引きずり込もうとしているのだった…。

カールはサーベルを鞘から抜くと身構えた。そして息を飲む…。その瞬間、通りが凄まじい炎の音とともに明るく光った。カールは地面に転がったが、いそいで立ち上がると駆け出した。カールの耳に鉄が弾けるような音が響いた。それは頭の上から聞こえてくる。

カールは路地の入口につくと屋根を見た。誰もいない。鉄がはじける音は遠くなりあたりは静寂を取り戻そうとした、そのときカールは足元に恐ろしいものが転がっているのに気付いた。黒焦げになった人だった。男なのか、女なのかもわからなかった。煙を上げ、肉の焼けるにおいを漂わせていた。口を開き関節が曲がっているためかまるでカールに助けを求めているように見える。

腰に力が入らなくなり地面に倒れ込むと目に涙を浮かべながらカールは小さなうめき声を上げる…。

どのくらいそうしていたのだろう…。誰かが来て彼のわきを持ち上げ、助け上げるまでの時間を、そしてそのあとのことを…。ぼんやりと夢をみているだけのよう…。長い時間だった。

7・デスダスト

キツチヨムは小屋に戻つてくるとドアを後ろ手にしめた。ドアにもたれかかりぼんやりと天井を眺めている。棚の上にある大きなガラスの瓶を眺めた。三つ並んだ大きな瓶はすでに二つが空になっており、残る一つには緑色のパウダー状の粉が半分ほどになっていた。デスダストだった。死人の腐敗を防ぎ、傷を癒す。

キツチヨムはデスダストがこれほど少なくなったのを見たことがなかった。減らしたのは自分だったがどうすることもできなかった。いつの間にかデスダストを作るのをさぼるようになっていた。作るうと思ふのだが、作らなかった。ただの怠慢に思える。自分が情けなく思えた。

ドアから背中を離すと大きな黒々とした窯に近づく。キツチヨムが見上げるほどの大きな鉄の塊だ。両開きの扉は重く、一度に開くことはできなかった。片方ずつ身を入れて扉を開くと、内側にもう一つの鉄の塊、二重の窯になっているのだった。そこにも扉がついていた。小さな鍵穴のついた扉だ。

襟元に手をつ込み鎖のついた小さな鍵を取り出した。鍵を鍵穴に差し込みまわしすと窯がガタガタと音をたてた。両側から鉄の杭が二本飛び出す。キツチヨムは杭を掴むと一本を上に取り上げ、もう一本を下に引き下ろした。ガタリという音とともに鍵が外れ扉が浮き上がり隙間から赤い光が漏れ出した。

扉を開くと格子状の鉄の枠が現れる。その真ん中に赤い水晶玉がある。だがその水晶玉は赤く見えるだけだ。窯の中に炎がありその水晶玉を通して炎をみることができるようになっていたのだ。

キツチヨムはその水晶を覗き込み炎を見つめた。キツチヨムの顔が赤く照らし出される。水晶を通してみる炎はさかさまに映し出さ

れ、まるで滝のように流れ落ちている。

キツチヨムの瞳の中にも炎が映し出された。炎がどんどん強くなつていく…トグロを巻いて上も下もわからなくなる。窯がガタガタと揺れ始める。炎の奥底から人の悲鳴が聞こえ始めた。キツチヨムは耳を澄ます。そして瞳を閉じた。

突然、窯が吹き飛んだかのような凄まじい音がキツチヨムの耳に響いた。炎はキツチヨムの足元を音を立てて走り、凄まじい風を巻き起こした。雷鳴が響き渡る…。

キツチヨムはゆっくりと瞼を持ち上げた。すでにキツチヨムの立っているのは墓守の小屋ではなかった。天がわれたかのような赤い落雷が幾重も走り。遠くから止むことのない悲鳴が聞こえる。黒い土の地面に赤い血が湯気を立ててながれていた。焦げ臭いにおい、微かに硫黄のようなにおいが混じっている。まるでデスダストのようなおいがあった。ここは地獄だった。

いや、地獄の入口だ。そうエギオンは教えてくれた。そして墓守は地獄の入口からけっして足を踏み出してはならないと…それは墓守のタブーの一つだ。

何世代遡るのだろうか、昔一人の墓守がいた。彼の名前はそう、『ルカ』だ。地獄から『地獄の炎』を持ち帰った男だ。どうやって生きたまま地獄へいったのだろうか？いまや第2の窯に収められている地獄の炎を通して墓守たちは地獄の入口にたつことができるようになった。

当時デスダストを作るためには何年も時間をかける必要があった。しかし、ルカの持ち帰った地獄の炎はたった七日でデスダストをみごと完成させたのだ。そしてその炎はけっして消すことはできない…。永遠に…。

キツチヨムの耳にエギオンの声が聞こえる…。子供のころキツチ

ヨムはエギオンと共にこの地獄に来たことがあった。少年だったキツチヨムは恐怖で震えていた。目に涙をためながらずっとエギオンの足にしがみついていた。

『何世代にもわたり墓守は命を懸けてきたのだ。デスダストを少しでも完璧なものにするために…。見るがいい、ここが我々の聖地だ…』

キツチヨムは辺りを見渡した。どこを見渡しても同じ景色、雷鳴と悲鳴、血の河と吹きすさぶ風。どこを向いても不思議と正面から風が吹いてくる。

『いいか、キツチヨム約束してくれ、決して掟に背かないと…。掟は墓守が命を落とした証拠だ。ルカのようにすぐれた業績は残せなかったが、彼らはわたしたちにくつかのタブーを残したのだ、わかるな？』

少年だったキツチヨムにはよくわからなかった。でも頷いた。この場所がとても恐ろしかったからだ。

エギオンは地に膝をつけるとキツチヨムに視線を合わせた。優しく微笑んでいる。

『もう帰ろう…』

その言葉を聞くとキツチヨムの瞳から自然と涙がこぼれ落ちた。エギオンにしがみつくとは度もうなずいた。

『帰ろう…。墓守は地獄の入口からけっして足を踏み出してはならない。ここが地獄の入口だ。私たちが入ることが許されているのはここまでだ…』

… キツチヨムはゆっくりと目を閉じた。雷鳴も悲鳴も、燃え盛る炎の音も遠くなっていく…。

… つぎに瞼を開くとキツチヨムはもといた小屋に立っていた。

薄暗く冷たい小屋の中は乱れていた。確かに部屋に存在するものはあるべきところへ収められていたが、この部屋の空気がそう思わせるのだろう。

キツチヨムは部屋の中を見渡した。幾世代にもわたり、墓守たちはこの部屋での生活を強いられた。扉は自由に開き、自由に出入りすることができた。窓も開くことができる、その新鮮な空気を部屋に入れることもできる。しかしここは牢獄のようだ。そしてなぜか逃げ出したものはいない。

キツチヨムは扉に目をやった。扉に古い傷がついている。何者かが掻き寄った跡がのこされていた。爪が割れ血の跡が黒く木の扉にしみこんでいた。ベットの柱には深く削られた後、キツチヨムはここに鎖でつながれた何かがあつたと思つている。そしてそれは墓守自身をつないだものであることも容易に想像できた。この部屋の黒く変色した汚れ…。そのすべてが血の跡であることも…。

天井の柱の張りにも無数の傷跡、首を吊ろうとしたのは何代目の墓守だろう…。

世界のどこから連れてこられた凶悪な犯罪者たちはこの墓場で残りの人生をソルマントの墓守として過ごした。先代の墓守のエギオンもまた犯罪者だ。彼はそのことを否定したことはなかったし、過去を語ることは一切しなかった…。

ただ、キツチヨムは違った。

『お前は、ちがう…。お前は特別な存在なんだよ…』エギオンはそういつた。彼は犯罪を犯したことなどなかった。人から恨みをかうことなく、この墓場でひっそりと生きてきたのだ。彼は物心ついたころからこのソルマントにいた。孤児だった。

エギオン…もし僕が特別な存在だったとしても、それは僕にとつ

てどんな意味があるの？いま、キツチヨムはそうエギオンに問いたかった。僕はルカのように偉業を成し遂げるような存在じゃない。それに偉業をなしとげたとしても、僕に目を向けてくれる人はいるの…？僕に目を向けてくれる人なんていないだろう…。僕はソルマントの墓守だ。

たとえ墓守の歴史の中で特別だとしても、僕はこの世界でもっとも孤独な存在だ。ねえ、エギオン、だれが僕に温かい目を向けてくれるの？

僕には父も母もない。もし父親と呼んでいいなら、エギオン、あなたが僕の父親だ…。キツチヨムはマントを脱ぎ壁にかけた。黒く艶のある重いマント、エギオンが残したマントだった。ぼんやりとマントを眺める。手を伸ばしてマントに触れた。

でも、あなたももういない…。

7・ニデスダスト - 3 (前書き)

キツチヨムはマントから手を離すと書棚の前に歩み寄る。壁いっぱいには書棚が並べられ、乱雑に書物やひもで縛った書類が放り込まれている。キツチヨムは何冊かの本に目を通していた。しかしどれもエギオンがキツチヨムに話してくれた内容だった。だからほとんどの本に目を通していかない。残りの本や書類も結局すべてエギオンがキツチヨムに教えたことばかりだろうから……。エギオンは朝日が昇る時間になつても書物を開いていた。夕暮れ近くキツチヨムが目覚めると書物を開いたまま居眠りをしている。そんなことが日常茶飯事だった。

キツチヨムは書棚に歩み寄ると本と壁の間に手を差し入れた。右手で落ちそうになる本を支えながら分厚い一冊の本を取り出した。ページとページの間にメモや何かがたくさん挟まっており、それらがあちこちから飛び出していた。それらが落ちてしまわないように革ひもできつく結ばれている。

それを机の上に置くと革ひもをほどいた。その本はバサリと音をたてて開き、メモや紙切れがページから吐き出された。キツチヨムは折りたたまれた分厚い紙をとりだすと本を傍らに引き寄せ机の上に広げた。

地図だった。スタンが言うには世界の何百分、何万分の一の地図……。この地図は世界の実際の大きさよりもっと小さいかもしれないが……。この地図は描かれている陸地よりもっと大きい。世界のほとんどが水でできているらしいのだ。キツチヨムはスタンがまた冗談をいっているのかと思った。地図の上では海はまるで川のように広がっていた。だが、この陸地の端から川を挟んだ向こう岸は天気がよく晴れ渡っていて、どんなに目を凝らしても見えないほど距離があるのだとスタンはいっていた。

そしてソルマントは小さな点、いや点よりも小さい。この辺りだ

…。キツチヨムは地図に顔を近づけ覗き込むが見えるはずがなかった。スタンはキツチヨムが地図を覗き込むのを見ると腹を抱えて笑うのだった。世界のどこをさがしても地図を覗き込むのはキツチヨムだけだという…。たしかに…おかしかった。

地図から目を離し、本のページをめくるとそこには大きな黄金の町が描かれている。たくさんの人や馬がとても小さく、豆粒のようだ。スタンは笑って教えてくれた。これは宮殿で国を治める王が住んでいるのだと。それが町ではなく宮殿であることに驚いた。いたい王様はどんな生活をしているのだろう…。宮殿の周りにつつすら影の部分があった。そこに町の人々が住んでいるのだという。影の部分は遠くつつすらとどこまでも続いている。とても大きな都市だ…。スタンがいうには東へ行けば氷で宮殿を作った女王がいるとのことだった。氷の宮殿…。一度でいいキツチヨムはその宮殿を、世界中の宮殿を見たいと思った。

たった一冊の本を見ているだけで、キツチヨムはまるで夢の世界を覗き見ている気分だった。墓守の残した書物やデスタストがともちっぼけに思える。

ページをめくると一枚の紙切れが机の上に落ちた。その紙切れを手にとった。それはスタンがキツチヨムにくれた船の半券だった。キツチヨムがどうしても欲しいとスタんにせがんだものだった。

本のページを見ると大きな帆船の絵があった。三角形の帆と四角形の帆を幾重も重ねたその船は地平線をバックに白い水しぶきを高くと上げていた。帆は膨らみ風をしっかりと捕まえている。帆船は風を受け馬よりも早く走るらしい、とてつもなく大きいのに海の上を浮かんで進むのだ。

スタンはこれに乗って海の方こうグレートブリテンというところに行った。紙切れはその時の半券だった。残念ながら残りの半分は船乗りが持って行ったということだった。それが船に乗る時の決まりらしい。

半券をスタンがゴミだといって捨てようとしたのを見て慌ててキ

ツチヨムはいらないなら欲しいといった。スタンは怪訝な顔でキツチヨムに半券を差し出したが、なんども「もう乗れないからな」といった。キツチヨムは半券を掲げて眺めながら何度もうなずいた。スタンの言うことなど耳に届いていなかった。うれしくてしかたなかった。これを持っていればいつか自分もあの船に乗れるような気がした…。

そしてこの本をスタンがキツチヨムにくれたのは、彼が死んで、キツチヨムの前に初めてソルマントの死人として姿を現した日だ。彼はキツチヨムの前に歩み寄ると本を差し出しこういった。

「死人には必要ないからな…」そう言って笑っていた…。

その日から毎日この本を読んだ、メモの細部まで。しつこくスタンに話をせがみいろんな話を聞かせてもらった。キツチヨムが不思議に思うことは彼がなんでも説明してくれた。本を開くと胸が高鳴り、まるで知らない土地を渡り歩いている気分になれた…。

しかし、ある日ふと、気付いたのだ。温かいスープを飲んでいた時だったろうか…。それとも布団に潜り込んで寝返りをうった時だったろうか…。キツチヨムの胸に、耳に、いまはもう体の感覚だけが記憶してる…。それは突然やってきた…。

「死人に必要なものはない、墓守にも必要ない…」

キツチヨムはこの本を革の紐で硬く結び、書棚の奥へ、見えないところへねじ込んだ。悔しくて、情けなくて…いいよのない悲しみが彼を苦しめた。

それでもキツチヨムは笑って過ごせた。デスダストを作り、ワインを飲み、死人とダンスを踊ったり…。歌を歌ったり…。ソルマントの墓守をちゃんとやってのけた、ずっと笑って過ごせるはずだっ

た。あの日までは…。グレスフォードの老婦人と言葉を交わすまで
は…。

8・グレスフォードの老婦人

暗い森の道を馬の背に揺られキツチョムはレイモンドの町へと向かっていった。深い闇が森を覆い、その闇に木立の影も飲み込まれるほどだった。栗毛の馬は鼻をならしながら草の匂いを嗅いだり、木々の隙間に見える青い空をぼんやり眺めながら歩を進めた。まるで散歩にでもくり出したかのように歩を進めている。

キツチョムは夜目が効いた。幼い頃からというよりずっと夜の世界で生きていたからだろう…。教会の人間が首をかしげ不思議に思うほど夜の世界を光なしで驚くほど速く走ることができたし、どこになにがあるのか初めから知っていたかのようにあらゆるものを暗闇の中から見つけることができた。それでもキツチョムはみんなと同じようにランプを使い、ロウソクを灯してすごしてきた。

しかしこの日は明かりを持って行かないようにしている。もう、何年もそうしている。習慣になっていた。

この日は町に寄進品を集めにでかける日だった。

レイジーの鼻の向ける方向には黒い棘のような草が生えているばかり、見上げた空には星は見当たらなかった。

「レイジー。あまり遅いと日が昇るだろう…。いつもと変わらない森がずっと続いてるだけだよ…」

キツチョムは笑みを浮かべるとレイジー・フォンデモンテの太い首筋を撫でた。暗い夜道でも微かに光沢を放つその栗毛の毛並みは滑らかで温かかった。

わかっているよ…。レイジーはそう言いたげに鼻を鳴らした。でも、レイジーフォンデモンテは軽快に蹄の音を闇にしばらく響かせると忘れてしまったかのように速度を落とすした。

「ああ…」キツチョムは苦笑いを浮かべ、懐からかすかすになったパンを取り出し口に運んだ。

じつのところレイジー・フォンデモンテは自分のするべきことをしっかりと理解していた。墓守と町に入ったら絶対に足をとめるな。これは絶対だった。足を止めず全速力で駆け抜けるのだ。一筆書きで線を描くように町の入り組んだ通りを一気に駆け抜ける。けっして墓守の手綱に頼ってはいけない。

ロシユフオール・レックス、馬小屋の主からきつく言い聞かされてきた。彼の黒毛は月の光をつけてとても艶やかに輝く、どの馬よりも早く走れて力が強かった。そしてだれよりも、もしかした人間よりも頭がいい馬かもしれない。

彼らがひたすら風を切り蹄で地面を蹴っている間、墓守は道に放り投げられてる白い袋を器用に馬上から鉤棒で取り上げては背中に取り付けられたたくさんのフックにひっかけていく。白い袋を一つとして逃すことはない。

少しづつ背中が重くなってくるがレイジー・フォンデモンテに取っては大したことではなかった。

いつのころからか彼にとってこの仕事は一番大好きな仕事になっていた。だから彼は体力を温存させていた。

そしてキツチョムを背中に乗せての町へ寄進品を集めに行くみちすがら、のんびりした時間を過ごせるのはこの時だけだった。彼はこの仕事が好きだったが、キツチョムはもつと好きだった。

キツチョムが手綱を強く握りしめるのがわかった。手綱をとおして彼の緊張感がレイジー・フォンデモンテに伝わった。レイジーが顔を上げると木々の隙間にグレスデンの塔バルバドスが見えた。町にたてられたバルバドスの塔は中心に高くそびえたっているのだ。町はもうすぐそこだった。

8・グレスフォードの老婦人 - 2 -

グレスデンの周りに茂る木々や草花の間には崩れた人の手が加わっているであろう小さな岩山がどこどころに頭を出している。それはこの町が城下町であり城壁で囲まれていたことを物語っていた。当時は今以上に繁栄していたことだろう。当時の面影を残すものはすべて遺跡のようにひっそりと町の風景に溶け込み、いつのまにか誰からも顧みられることはなくなっていた。

土の道がしだいに薄くなりところどころ石畳が現れた。丸いゴツゴツした石畳にうつすらと残る轍の跡がこの町の古さを物語っているがキツチヨムは気にせず手綱を握った。レイジীর蹄の音色が蹄鉄の石を叩く乾いた音にかわっていく。町の入口が見えた。灰色の石畳が闇へとつづいてるようだ。町の灯はこの日極端に少なくなり、グレスデンの町はひっそりと静まり返っている。闇に包まれる町は大きな口を開けているようだった。その口はキツチヨムとレイジীর飲み込む。あとは聞き耳を立て彼らが去っていくのをじっと待っているだけだった。

キツチヨムは鉤棒を握りしめ強く手綱を引いた。緊張感がレイジীর前足を高々と上げさせた。レイジীর前足で空を掻きむしると勢いよく首を振り下ろした。レイジীর前足が石畳を激しく叩くとキツチヨムは風に包まれた。激しく吹き付ける風を交わすようにキツチヨムは上半身をかがめ、あぶみに乗せた足をレイジীর横っ腹にしっかりと固定した。両手でしっかりと鉤棒を握りしめる。

「ハアッ!!!」

キツチヨムは足を緩め叫び声と共にレイジীর横っ腹をあぶみで蹴りつけた。「まだまだ…君はもつとはやく走れるんだ!」レイジীরにはキツチヨムの言いたいことが手に取るように分かった。彼の体の中から熱いものが込みあげてくる。叫び声を上げずにはいられない

かった。

レイジーのいななきは石畳を飛び跳ね、家々の壁にぶつかり夜の闇に響き渡った。

キツチヨムとレイジーは町の入口を蹄鉄の音を打ち鳴らし、落雷が天を裂くようなスピードで駆け抜けた。

風はキツチヨムの耳元で悲鳴を上げた。暗い街並みが風に吹き飛ばされていく。吹き付ける風を真つ向から迎え撃つようにキツチヨムは目を見開いた。道に転がる白い袋が彼の目に飛び込んでくる。マントが風を捕まえようと激しく音を立っている。

右に流れゆこうとする袋をまるで川の中の魚を捕らえるかのよう
に目の端でとらえるとキツチヨムは鉤棒を振るった。すでに次の袋
をキツチヨムはその目に捕らえていた。鉤棒の先に引っかかった袋
はキツチヨムの周りを円を描くように吹き飛んだ。キツチヨムは上
半身を後ろに倒しそのまま次の袋を鉤棒で捕まえた。

一瞬の出来事だった、二つの袋は鞍のフックに収まった。しかし袋
は恐ろしいほどの勢いでまだ流れてくる。

レイジーは必死に走った。その瞬間、鉤棒の間合いよりも遠い場所
に袋が流れていくのが目に映った。でも止まらなかった。

「絶対にとまるものか!!」

キツチヨムは片足をあぶみから離し、レイジーを跨ぐと濁流のよ
うに流れていく石畳に今にも飛び込もうとする。あぶみに残った片
足に力を入れると体を流れに落とした。手を伸ばし、鉤棒を槍のよ
うに突きつける。キツチヨムの体が地面に落ちていく。手首をねじ
り力を入れ、鉤棒を天にかざした。奥歯を力いっばいかみ合わせる
と自由な足を振り上げる。そして激しく流れゆく石畳を鉤棒の末端
で力の限り弾いた。

キツチヨムの体が宙に浮いた。あぶみにかかった足を軸に体重を
移動させ片足を鞍に乗せた。キツチヨムの左手に袋が落ちてくる。

鉤棒の末端を握るとキツチヨムは鉤棒を大きく振り回す。目の前

に流れてくる袋は消えてしまったかのように鉤棒の先が持つて行ってしまふ。鞍につながれた袋は確実に数を増やしていった。レイジ―の耳の後ろでキツチョムのマントが音を立てて暴れていた。

レイジ―の前方に黒く大きな壁が立ちはだかった。ロシユフォー
ル・レックスの黒い壁だ。ロシユフォーは言った。『俺はあの道
を全速力で駆け抜け壁に突っ込み、そして曲がることできる…』

「僕にだって…!!」

黒く大きな壁は驚くべきスピードでレイジ―に迫ってくる。

「とまるもんか!!絶対に足を緩めないからな!!」

レイジ―は首を激しく振りたてがみを揺さぶると、さらにきつく石
畳を叩いた。レイジ―の視線が壁伝いに連なる暗い路地に向けられ
た。曲がり角だ。

激しく石畳を蹴りながら体を倒す。全体重が四本の足にかかる。

首を低く落とそうとするがレイジ―の首は浮き上がっていく。体が
徐々にバランスを失っていく…。レイジ―の首筋に冷たい汗が噴き
出した。曲がりきれそうになかった。

「吹き飛ばされる!!」

レイジ―は足を跳ね上げ目を閉じた。

キツチョムの目にも 迫りくる壁が見えた。あぶみから両足を外
した。レイジ―の体が激しく傾くと鞍を蹴った。宙に投げ飛ばされ
る瞬間反転し片手で鞍を掴む。レイジ―の体を引き寄せ、力いっば
いあぶみに片足を踏み入れレイジ―の体を固定した。宙を舞う手綱
がキツチョムの視野に入った。両手は塞がっていた。キツチョムは
目を見開くと目の前の手綱に噛みつき、首の筋が切れんばかりに手
綱を引きあげた。

レイジ―の首に力が加わった。突然レイジ―の体はバランスを取
り戻した。暗い路地に恐ろしい速さで吸い込まれていく。

レイジーが目を開いた時、暗い路地が吹き飛び月の光が届く広い通りがすぐそこに迫っていた。前足を高々と上げながら、後ろ脚を蹴り上げた。キツチョムを背に宙を舞った。キツチョムが叫び声を上げた。

「レイジー、レイジー、君はすごい!!」

月の光で輝く石畳に蹄鉄の音が響きたったときレイジーは今までにない最高の気分を味わっていた。

「僕はいま最高の仕事をしたんだ!!」

だからといってレイジーは足を止めなかった。『墓守と町に入ったら絶対に足をとめるな…』だ。

8・グレスフォードの老婦人 - 3 -

レイジーは悔しさで足を踏み鳴らした。首を振り地団駄を踏んでいる。「どうして…こんなことに…」レイジーは悔しくてたまらなかった。最高の仕事をした矢先、広い通りを曲がったところでキツチヨムは綱を強く引き、レイジーの前足を振り上げさせ首をあらぬ方向へ向けさせたのだ。レイジーはわけがわからず暴れる以外しようがなかった。

「落ち着いてレイジー！落ち着くんだ！」馬上でキツチヨムが叫んでいる。手綱を右に左りに引きながらレイジーが暴れるのを制止させようとする。

「あれを、あれを見て…」

ようやくレイジーは落ち着きを取り戻した。暗い道の先に明るい光がぼんやりと揺れている。右へ…左へ…右へ…黒い影がランプを持ってなにか合図を自分たちに送っているらしかった。

レイジーがおとなしくなると、闇にぼんやり浮かぶランプの光はぴたりと止まった。自分の存在を知らせるためにランプを振っていたのは明らかだった。キツチヨムは馬上でしばらくランプを見つめていたが意を決したようにあぶみから足を離してレイジーの背中から飛び降りた。

レイジーは首を振り鼻を鳴らした。寄進品集めで足を止めてしまったうえに、墓守が背中から降りてしまうなんて…あつてはならないことだ。

キツチヨムはレイジーに目を向けると彼の鼻筋を撫でた「怖がらなくていいさ…大丈夫…」そういうとキツチヨムはランプの光に目を向けた。手綱を引き歩き始める。

これ以上ひどいことは起こりそうになかった、レイジーにとって最悪の出来事とはつくに起きてしまったんだから。力なく首を落とすと手綱にひかれるままレイジーは歩を進めた。さつきまでの最高

の気分が嘘のように消し飛んでいた。

キツチヨムは光に近づく道すがら腰を落として白い袋をひとつ拾い上げ鞍のフックにひっかけた。歩を進めていくとランプの光が大きなコート of の男を闇に浮かび上がらせた。大きな男だ、でもマツチ棒のように痩せていた。初老の男ですでに背筋が幾分まがっている。まるで首が転げ落ちてきそうだった。

キツチヨムがレイジーを引き連れ近づくとき後ずさりをして大きな門の影に隠れようとする。おびえているように見えた。それを見てキツチヨムが足を止めると、今度は激しく手招きをする。キツチヨムが男のそばまで来るころには門を馬一頭通れるほど開いて体を隠し顔とランプだけをのぞかせていた。キツチヨムが少し見上げなければならぬくらいの大男は声を押し殺していった。

「な、なにをしているんですか！？はやく、はやく中へお入りください！！」男は声を落としていたが丁寧な物言いと裏腹に焦りといら立ちが感じられる強い言い方をした。

しかし、キツチヨムは大きな門を見わたし、闇の道に沿ってどこまでも続くような塀に目を奪われた。ここはたしか、グレスフォードの屋敷だ。キツチヨムでもそれぐらいのことは知っていた。モリスや神父の話にときどき出てくる名前だったからだ。

「町の者にみられるわけには行かないんです！早くお入りください！」そういうと男は門の中に逃げるように入っていく。首を振りとどまろうとするレイジーを引っ張りながらキツチヨムは門の中に入る。レイジーは敷地内に足を踏み込むと諦めたように歩き始めた。

敷地の中に入るとあたりを見わたす。広い庭の真ん中にとて巨大な岩があった。石というより崩れた壁だ。城壁の一部だろうか。もしかしたら以前は目の前の大きな屋敷よりももっと大きい、空を覆い隠すような大きな城が目の前にそびえたっていたのかもしれない。キツチヨムはそんなことを考えた。巨石の周りは手入れの行き届いた芝生が円形の島を作っており周りを石畳の道が取り囲んでい

た。

大きな観音開きの扉が前方に見える。数段の石の階段の上に立つその扉は教会の扉ほどの大きさがあるが、もっと厚く重そうに見える。その扉の石段のそばに一人の少年の影があった。どうやら大きなハンチング帽をかぶっているらしく体に不釣り合いな大きな頭をしている。

大きな男はキツチヨムとレイジーを残し足早に進み、少年の前に立ち何やら話をしていた。大きなマツチ棒のような男と体に不釣り合いなハンチング帽をかぶる少年の影があだこうだと体を動かしている。まるで影絵芝居の人形のようにとても滑稽だった。

男はキツチヨムに体を向けるとはげしく手招きをした。

キツチヨムは足を少し早めて男のもとに近づいていく。しかし男は自ら少年を引き連れやってくる。「お急ぎください…手綱を…」
そついうとレイジーの手綱をキツチヨムの手から半ば強引に奪い少年に引き渡した。「彼は馬の世話係です…、さ、はやく奥様がお待ちです…」

奥様…？グレースフォードの婦人だ…「彼女がいったい、僕に…？」
そつ聞きたがったが目の前でレイジーが鼻を鳴らしていまにも声をあげそつになつていいる。少年が腰を引いてレイジーをひっぱり始めていた。あわてて鼻筋を撫で「大丈夫…すぐもどるよ」とキツチヨムがいうといやいやながらもレイジーは観念したようだった。

男はすでに歩き出しており、足早にまっすぐ扉に向かっていた。キツチヨムもレイジーの手綱を離すと男の足に合わせて足早についていくしかなかった。

8・グレスフォードの老婦人 - 4 -

グレスフォードの大きな扉が人ひとり通れるほど開かれていた。キツチヨムが覗き込むと中は意外にも真つ暗だった。ランプの光に照らされてぼんやりと闇の中に男が浮いている。先に行く男はすでに階段に足をかけキツチヨムを待っていた。

キツチヨムが中に足を踏み入れると階段の中段まで上がっていき手招きをした。

歩きながらあたりを見わたすとキツチヨムの目は驚くほど早く暗闇に慣れていく、瞳孔が光をかき集めるように開く。キツチヨムの目は不思議なレンズのようだった。

キツチヨムの目はうつすらと二階の廊下、扉などをうつすら見て取れることができるようになった。

玄関はひろく綺麗に磨かれた石で格子状に覆われている。ランプの光を受けて光っていた。赤い絨毯が引かれている。しかしとどころ擦り切れている。正面の大きな階段は途中で二手に分かれており、ちょうど踊り場のようになっている。そこには二枚の大きな肖像画がかけられていた。男は左側に上がっていく階段に足をかけて踊り場でキツチヨムを待っていた。

キツチヨムは踊り場まであがると肖像画を見上げた。ふたつの絵に描かれた人物は同一人物だ。ブラウンの髪と口髭。やさしい目がとても印象的な男だ。ゆつたりとした服を着て椅子に腰かけ微笑かに笑みを浮かべている。キツチヨムは自分の中の好奇心がゆつくりと頭をもたげ始めるのを感じていた。まるでさっきまでの不安を覆い隠すようにそれは心を支配していく、まるでスタンがくれた本を読んでいる時と同じような鼓動の高鳴りを感じた。

もう一方の絵のその男は鎧を身にとって立ちあがっていた。遠くをにらみつけるような目をしている。室内の椅子に腰かけている優しい目とは対照的に勇ましい印象をうける。なんだか背筋を思い

つきりひっぱたかれたような、居住まいを正さずにはいられない圧迫感があった。

「ゴホンッ……!!」突然闇に響いた咳払いにキツチヨムは目を上げた。ランプが目の前に近づけられていた。一瞬目の前が白一色になる。瞳孔が激しく収縮する。キツチヨムは目を閉じずにいられなかった。

男はキツチヨムが頭を激しく振るのを歯牙にもかけず階段を音もなく上がっていった。激しく瞬きするとキツチヨムは慌てて男の後に続いていく、階段をあがると暗い廊下の先に男のランプが揺れていた。廊下の四方を照らし出しながら男の背中を浮かび上がらせている。不意に足をとめドアに耳を近づけ軽くノックを繰り返した。大きな屋敷だったが意外と早く目的の部屋についたらしい。キツチヨムは少し残念に思わずにいられなかった。

男は小さなノックを何度か繰り返した。するとすぐに扉の向こうから返事が聞こえた。

「はいりなさい……」

男は扉を開いた。

「彼を連れてまいりました。すぐここへ……」そういいながら暗い廊下に目を向けようとした。「なっ……!!」

キツチヨムはいつの間にか男のすぐ後ろに立っていた。腰をすこしかがめ中を覗き込んでいるのである。わきの下のキツチヨムの見開かれた目と男の視線が合わさった。

男はキツチヨムをにらみつけた。キツチヨムはキョトンとした目をしていたが、なにかを察知したのか背筋を伸ばすと一歩下がった。「なにをしているのです？はやく入りなさい」

グレスフォードの老婦人は年老いていたがも声には力がこもっており、背筋を伸ばして立つ姿は年を感じさせないものがあった。本を読んでいたのであろう分厚い本に手をおいていた。

男が身を引いたので言われるがままキツチヨムは部屋の中に入っ

た。

「コールリッジ……」

男は名を呼ばれると黙ってうなずきドアを閉めた。

とり残されたキッチヨムは部屋の中をぼんやりと見わたした。なんだか夢の中にいる気分だった。壁に掛けられた燭台には真新しい蠟燭がたてられ、ランプが暖かい光をあたりに向けていた。とても明るい部屋だった。しかしそこは客間とは程遠い部屋だ。老婦人が座っていただろソファと椅子、書物の置かれているテーブル以外の家具は白い布をほこりよけに被っていた。どうやらキッチヨムは歓迎されているわけではなかった。

「オーハン・キッチヨム……」キッチヨムは不意に名前を呼ばれて老婦人をみた。

ブロンドの髪は頭の上に束ねられ、注意深く見るところどころ白くなっているのがわかった。大きなエメラルドグリーンの瞳の周りには深くしわが刻まれ、皮膚が乾いているような印象を与える。口元に刻まれたしわは浅かったが首筋にまで伸びいていた。

背筋を伸ばしていると大柄な体がさらに大きく見える。肖像画の鎧を着ていた男を思い出さずにはいられなかった。

老婦人はキッチヨムに背を向けると窓に向かって歩き始めた。

「エギオン……」キッチヨムは自分の名前につけたすようにこう言った。「僕はオーハン・キッチヨム・エギオン」

「その名前を使うのはやめになさい……」老婦人は一瞬足を止めるとつぶやくように言った。窓のそばに歩み寄るとガラスに映るキッチヨムをみた。

キッチヨムはアレーネの後姿を見つめた。とても居心地が悪かった。さつきまで頭をもたげていた好奇心はとつくに消し飛んでいた。ガラスに映る老婦人とキッチヨムの視線がぶつかった。

「わたしは、アレーネ・グレスフォード。私のことはこれ以上話すつもりはありません……、それにあなたにとってはどうでもいいことです」

キツチヨムは視線を落とした。自分がなぜここにいるかまったく見当がつかなかったからだ。まるで叱られているような気分だった。そんなキツチヨムには無関心にアレーネは続けた。

「時間がありません。単刀直入にもうしまししょう。墓守をおやめなさい…」

キツチヨムは顔を上げた。よくわからなかったのだ。やめる…？ 墓守を…？

アレーネはキツチヨムに体を向けると反応を見るようにその眼を見つめた。だが、その眼からは得るものがなかったのだろう。

「いいですか？ わたしは、墓守をやめなさい、そうだったのです」
キツチヨムは目線を落とし床を見つめた。キツチヨムから考える能力が失われていた。足元に答えを探す。あらぬ方向に目を向け目に映るものの中に何かしらの答えを探そうとしている。

しかしアレーネは構わずつづけた。

「あなたは墓守には向いていない。代わりの者は簡単に見つかるでしょう。神父が用意できないなら、私が枢機卿に手をまわしましょう。あなたより墓守にふさわしい犯罪者が世の中にはたくさんいるのですから…」

キツチヨムの頭の中に遠くで鳴る鐘のようにぼんやりとアレーネの言葉が響き渡っている。声が響いてくる先に耳を傾け、それを探そうとする。

「あなたは町で普通の生活を送ればよいのです…、太陽とともに目覚め、月が昇れば眠ればいい。この町にとどまりたくなければそれもいいでしょう…。どこか別の国へ行き、あなたは学問をなさい…。あなたが世の中を理解できるまで、わたしが支援しましょう」

まるで体が宙に浮き始めたようだった。ぼんやりと体が揺れはじめ、目の前にスタンがくれた本のページがまるで手で触れることができるかのように再現された。それは光とともに現れては消えていく。キツチヨムはその世界に吸い込まれるような気分だった。

ただ、一つの言葉がまるで死人に杭を打ち込むようにキツチヨムの

胸に強く突き刺さった。

「 条件は、たったひとつ、あなたが慕守をやめることです…」

「

レイジーは最悪の気分だった…。頭を前後に振ってなんとか前足を踏み出す…。まさに疲れたような足取りで歩を進めた。グレスフォードの屋敷を後にしてから、いや、グレスフォードの屋敷の扉を出た時には、すでにキツチヨムの様子はおかしかった。まるで夢遊病者のような足取りで戻ってきたかと思うと、だまって鞍にまたがりフードですっぽりと顔を隠したきりあぶみを操ることも忘れていた。レイジーは仕方なく自分で歩を進め、グレスフォードの屋敷をあとにしたのだった。

そしてキツチヨムはあろうことか白い袋を見逃したのだ。レイジーがのんびり白い袋の横を通り過ぎようとしたとき、キツチヨムはピクリとも反応しなかった。走ってるのではない、レイジーはただ歩いていたので。レイジーは慌てて鼻をならした。キツチヨムは馬上から降り袋を拾い上げて、フックにひっかけた。馬上からでも簡単に取り上げられたはずだった。

とんでもないことになったぞ…。レイジーは思った。きつとあの大きな屋敷には魔法を使う悪魔が住んでいたに違いない。キツチヨムの魂を抜き取ってしまったのだ。それともキツチヨムの体の中に別の何かがあるのか？

「レイジー…」馬上に上がったキツチヨムからうつろな声が聞こえた。

レイジーの首筋に悪寒が走る。冷たい汗が吹き出し、首を持ち上げ石造のように固まった。両耳をゆっくりと後ろに向ける。

「走ろう…」

え…？レイジーは胸を撫でおろした。キツチヨムはキツチヨムだった…。そう思った。しかし、突然キツチヨムは声を荒げた。

「レイジー！走るんだ！全速力だ！」

キツチヨムが足にはめたあぶみに恐ろしく力が加わり、レイジー

の横つ腹をはげしく蹴り上げた。手綱を鞭のようにふるい叫んでいる。

前足を大きく振り上げ、いななきを響かせながらレイジーは全速力で走りだした。まるで体を炎で焼かれている気分だった。

今度はキツチヨムは袋を一つとして逃す気配はなかった。それ以上にもより激しく体を動かしている。キツチヨムの目が袋をとらえるたびにレイジーの体が右へ左へぶれるのだ。森の暗い木々が迫ってきていた。町の出口だ。

しかしキツチヨムはレイジーの足が緩むことを許さなかった。

「レイジー森をつつきるんだ！止まらないで！どこまでも！どこまでも…！」

無茶だった。森を突っ切るってことは教会を通り過ぎるってことだ。悪魔だ…！きつとキツチヨムの魂は魔法使いに奪われて、かわりに悪魔がキツチヨムの体に乗っ取ったんだ！！

しかしレイジーがもっとも恐れるのは悪魔ではない。あの馬小屋の主、ロシユフオール・レックスだった…。

レイジーは教会への入り口で思いつきり足を上げ走るのを拒否した。地団駄を踏み暴れたのだ。キツチヨムはあぶみに力を入れ、手綱を引いた。

「レイジー！レイジー！わかってるさ、教会だろ！？ついたんだ…！」

レイジーはふと足を地上にとどめた…。息荒く鼻をならした。馬上から飛び降りたキツチヨムの顔に目を向けた。とても優しい笑顔でレイジーに向けていた。「さあ、帰ろう…。今日はたくさん走った…。疲れたろ…？」鼻筋を優しく撫でてくれるキツチヨムは…、キツチヨムだった。

ただキツチヨムは今まで見たことのないさみしい笑顔をレイジーに向けるようになっていた…。

夜の静けさはやがて遠ざかろうとしていた。遠くの空がかすかに白く色を失うと同時に山の黒い影を日の光がぬぐい去ろうとしている。キツチヨムは広げた地図をたたみ、分厚い書物の間に挟んだ。革紐で書物をくくり、本棚に置いた。また、知らず知らずのうちにため息をついていた。

僕は墓守をやめるのか…。何度も繰り返しみずからに問いかけていた。ここ数日というもの頭の中はそのことではいっばいだ。しかし、墓守をやめるということがどういうことなのかキツチヨムにとつてはさっぱりわからないのだ。ただ突如として牢獄のようなこの小屋を飛び出して、広く青い空の下、草のにおいを運んでくる風の中で、誰かと笑顔であいさつを交わしてみたかった。陽だまりの中で誰かと語り合ってみてみたかったのだ。

明日、もう一度クレスフォードの屋敷に行こう…。もっともっと彼女の話を聞きたいと思った。そうだ、もう一度彼女の話を聞いてみよう。じつのところこの考えがキツチヨムの脳裏によぎったのは一度や、二度のことではない。けっきょくのところここまで考えが進むと振り出しにもどるのである。そんなこととしてどうなるのだろうか…？僕は墓守なのに…。

ふと、キツチヨムは顔をあげた。腫れぼったい目元に一瞬力がこもった。

「そうだ、グレスフォードの婦人をお願いするんだ…」キツチヨムはこの考えがしごくまともなように思えた。「デブイはおいしいものを食べたがっていた。おいしいワインを…。デスブーツのみんなもきっと同じに違いない。クレスフォードの婦人に頼んでみよう…！あの人はきつととても優しい人なんだ。だから僕を憐れんで墓守をやめていいといっているに違いない。僕に学問もやらせてくれるんだから…。ほかにも何かあったら、なんだったって？そう、支援だ、

僕のことを支援してくれるっていった。だったら、食べ物やワインくらい……。きつと、きつと……」

キツチヨムは靴音を響かせながら部屋の中を取り留めもなく歩き回った。ふいに足を止めると固い木を組み合わせただけのベッドにその身を投げ出した。大きく息を吸い込み胸が膨らむのを感じ取る。ひさしぶりに胸が躍るのを感じていた。ふと天井に残る傷跡、血のシミ跡が視野に入ったがキツチヨムの目はそれに向けられことはなかった。無意識に寝返りをうち胸に枕を抱きしめた。そして目を閉じた、早鐘のように鼓動が耳に響いていた。口元には笑みが浮かぶ……。どれくらいの間そうしていたろうか……。やがてキツチヨムは眠りに落ちていった……。

キツチヨムが眠りについた小屋の周りに暖かい光が充ち始めた。モリスがあわただしく場所の準備をし、神父を乗せて出かけていく。微かにレイジーやロシュフオールを立てる蹄の音が優しく朝の静けさの中に響いていた。

小屋に忍び込んだ朝の光がキツチヨムの瞼をかすめる。瞼が微かに振動する……。

キツチヨムは夢を見ていた。

大地に降り注ぐ日差しの中、とても暖かい風がキツチヨムの頬を撫でている。レイジーの背にまたがりのんびりとキツチヨムは小さい丘へ向かっていた。

マントを脱ぎレイジーの首にかけ、手綱を緩めて空を見上げた。澄み渡る空にちぎれた雲が白く宝石のように輝き流れている。森は遠く緑をひろげ、太陽に照らし出される草花は風にやさしく揺れている。鳥たちのさえずりはキツチヨムがやってきたことを歓迎するかのようになをあげていた。

ふと道の先に目を向けると小さな口バをつれた農夫がこちらに向かってくる。キツチヨムは胸の高鳴りを感じながら農夫を見ついていた。口バはレイジーを見ると小さく鼻を鳴らした。そして農夫は

すれ違いざま笑っていった。

「よいお天気ですな…」

キツチヨムは満面の笑みで答えた。

「…ええ！とても！！」

キツチヨムはいつまでも農夫の後姿を馬上から見つめていた。農夫の少し曲がった背中がとても愛おしかった。

レイジーが足をとめた。前を向くと小高い丘の上にたどりついていた。眼下には青くどこまでも広がる湖がひろがっていた。

「ああ…、レイジーあれが湖だ…」まるで鏡のようだった。「ほら、空が落ちてきたようだ…。それに…雲が泳いでる…」キツチヨムは笑った。

やがて湖が日の光を反射させてぼんやりと輝き始める、キツチヨムはまぶしさで何度となく瞬きを繰り返した。光の反射は湖面いっばいに広がる…すると、そこに黄金の宮殿が現れた。

「…ああ、宮殿だ…。見て！レイジー、あの小さな黒い影はみんな人や馬なんだ…。宮殿は王様が住んでいて、この世界を動かしてるんだ…」

宮殿が波を打つ…。小さな滴を一滴落としたような波紋が宮殿の中心からキツチヨムの足元までやってくる。湖の枠組みを超え、地に伝わり、丘に連なる崖を波紋が登ってくる。キツチヨムには、宮殿が湖と重なってみえた。その瞬間、湖の中心が天高く巨大な水しぶきを上げると角を持った白馬が現れた、その馬が一瞬、空中で停止する。

レイジーは地団駄を踏んで嘶いた。

水しぶきの中から巨大な船首が現れたのだ。大理石のように艶を放つ白馬を先頭に立てその帆船は水中から飛び出しキツチヨムの前にその巨大な船体を表した。船は船体を湖に叩きつけた。水面が怒号をたて、天に届くかのように舞い上がった。

「船だ！！急がないと！！」キツチヨムは叫ぶと同時に手綱を引き、あぶみでレイジーの横っ腹を蹴りつけた「僕は、あの帆船にのるん

だから！！」

丘の上から崖のように続く坂道を砂煙を立ち上げ全速力でレイジーは駆け降りていく。帆船は、雲のように真つ白なたくさんの帆に風を受け、水面を滑るように速度を上げ水しぶきをあげている。

キツチヨムはあわてて懐を、ポケットを必死にまさぐった。指に小さな紙切れの感触があった。それを取り出して天高く掲げた。

もう船の半券ではなかった。一枚のチケットが吹き付ける風の中、太陽を背にしてはためいていた。白く輝くチケットを頭の上で振りながらキツチヨムは叫んだ。

「おーい！！僕はその船に乗るんだ！！」キツチヨムの胸が壊れてしまうかと思うくらい高鳴っていた「レイジー、レイジー、近くに港があるはずだ！！」そういうとあぶみに力を入れた。

レイジーは帆船に負けなくらい早かった。キツチヨムとレイジーは帆船を見ながらどこまでも走りつづけた。そして叫び続けた…。

「おーい！！僕はその帆船にのるんだあ！！」

バレル・ガードナーはじつと暗い部屋の壁を見つめ何やら考え事にふけていた。

カールはただぼんやりとそんなガードナー見つめていた。カールはベットに横になっていたのだが、ガードナーが訪ねてくると何とか身をお越し彼を迎えた。カールの顔はほの暗い蠟燭の光のなかでもそれとわかるくらいやつれた顔をしている。まるで凍えてしまっただけのように薄い掛布団を引き寄せうずくまっていた。

「おまえも聞いたというのか……その、鉄の音を……」

「ええ……たしかに……」カールはそういいながら何度もうなずいている。

ガードナーは赤く縮れたひげをなでた。

「で……おまえはその音の主……?」

カールはあわてて激しく首を振った。膝を引き寄せ掛布団をきつく抱きしめた。恐怖が彼の中を駆け回っているのが見て取れる。カールは体に傷一つ負っていなかった。だからこそ心の傷が彼を苦しめるのである。もし、傷を負っていればその痛みで少しは恐怖が紛れていたかもしれない。ガードナーはそんなことを考えながら立ち上がった。

「お前は、二三日大人しくしている……、この事件はすぐにでも解決する。なに……墓守の一人や二人……」ガードナーはそういいながらそれが間違いであろうことはわかっていた。そして、自分がタムズにして見せた名推理も間違いだったと認めずにいらなかった。しかし、何者か判断がつかないままでは不安が募るばかりだ。カールを思っただけの言葉だった。

部屋を出ようとガードナーがドアに手を伸ばした時だった。

「あんなふう……、あんなふう……」人を、一瞬にして黒焦げにできるものなのだろうか……?」声を震わせながらカールがつぶやいた。

目を見開き布団をまつすぐに見つめている。

「不可能…だろうな…。」

「では、あれは…あれは…墓守の仕業なんかじゃ…」カールはまた首を激しく振った、まるで思いついた何かを頭から追い払おうとしているようだ。

「だとしたらなんだというんだ…？いいか、それがわかったのならこの事件が解決するまで大人しくしていることだな…」いまだカールに理性的にものを考える力があることに、ガードナーは少なからず安心した。あとは時間と…事件の解決が必要だろう…。

カールの妻リゼットは椅子に腰かけてテーブルにもたれかかっていた。階段を叩くガードナーの不恰好な靴音が聞こえると、リゼットは立ち上がり階段を下りてくる黒光りするブーツを見つめた。

ガードナーは階下のリゼットに目を向ける。

「すみませんな、奥さん。少々長居しまして…」

「いえ、そんなことより夫は、カールはどうしたんですか？なんだかみなさん、とても慌ててらして、夫を連れて帰ってくるなりほとんど何も言わずに出て行ってしまいましたから…」

ガードナーは階段を降りきると、玄関の扉に歩を進めながらいった。

「その…事件が起こりましてな、一人は顔を焼かれ瀕死の状態、もう一人は誰かもわからないほどに焼き尽くされていたんです。カールは二人目の犠牲者の現場に居合わせたんですよ…」

「ああ…」リゼットは口元を両手で覆い隠し、目を大きく見開いた。「ハカモリが…」

ガードナーはリゼットを見つめた。

リゼットはガードナーに見つめられると目を泳がせて続けた。

「みなさん、そのようなことをおっしゃってましたわ、わたし恐ろしくて…。明日はちょうど金曜日…今月は明日のはずですわ、墓守が寄進品を集めに来るのは…。きっと怒ってるんだわ、町みんな

がろくなものを寄進しないから…。わたくし明日はなにがいいものを見繕って…」恐怖からかまくしたてるように話し始めたリゼットの言葉をガードナーはさえぎった。

「なに…墓守は関係ないでしょう、そのことはカールも気づいている…。彼は怪我もしておらん。それに頭もしっかり働いていた。二三日休めばもとどおりだろう…。その頃には事件も解決してますよ。ただ、事件が解決するまで夜の外出は控えていただきたい。なにが起こるかわかりませんから…」そういうとガードナーは扉を開いてリゼットに向かい軽く会釈をした。扉を閉めたため息をつくとき髭を撫で、カールの家を後にするのだった。

ぼんやりと東の空が白くなっていた。夜は次第に西に追いやられていくだろう…。当分の間、夜は眠ることができそうになかった…。「覚悟せねばならんな…」ガードナーはぼつりとそうつぶやくと自宅ではなく自警団の詰所へと足を向けるのだった。

10・スプリング・ヒールド・ジャック

10・スプリング・ヒールド・ジャック

朝日が昇ろうとするころ、光の届くことがない暗い地下の通路。そこに赤く燃える目玉が二つぼんやりと浮いていた。石造りの壁はアーチ状になっている。どうやらそれは水路らしく四角く切り取った溝があり水が流れていた。その通路はいくつもわかれて蜘蛛の巣のようにグレスデンの町の地下に張り巡らされていた。しかしこの水路の存在を知る者は今となってはほんの一握り、完全に忘れ去られた過去の遺産であった。

その蜘蛛の巣の中心は少し広く彼にとって格好の隠れ場所となっていた。彼の目玉の炎がかすかに瞬き光を強くするとあたりがうつすら明るくなる。目の前に山積みになった鉄くずをジャラジャラと崩しながら彼はそれを手にとっては眺めていた。

「アイアン…、アイアン…」そう呟きながらただ鉄を眺めている。口から蛇の舌のような炎が鉄をなめあげている。鉄は温度を上げ赤く光る。

彼は口に鉄をほおばると口の端から煙が立ち上った。彼の体の中で炎が立ち上る音が響き、その音が地下の水路に響き渡った。

彼は口から鉄を吐き出した、それはゴトリと重たい音を立てて石の上を転がった。球形の形に変えた鉄くずを指の間に挟み持ち上げ目の前に掲げそれを眺めた。

赤く熱を帯びた鉄球…。

その球を眺め、スプリング・ヒールド・ジャックは不敵な笑みをみせるのだった。

『スプリング・ヒールド・ジャック』：彼が生まれたのは海を越えた国、グレートブリテンだった。彼がどのようにあの海をこえたのか。おそらくは誰にもわからないことであろう。彼に聞いてみたところで彼自身もおそらく覚えていないだろう…。

ただ、ここにひとつの恐ろしくも悲しい物語がある…。

『ヴァルハラ of 鉱石』と『安息のツルギ』

むかし、イングラントにホイットマンディー・ハウザーという鍛冶屋がいました。彼はとても腕がいいので『キング・オブ・ブラックスミス』と呼ばれていました。数十人の徒弟に、美しい妻ステファニー、彼はその名声を欲しいままにし、人生を思いのままに生きることが出来る数少ない人間だったのです。

そして、彼の妻は臨月を迎えていました。もうすぐわが子が誕生する。彼は人生の絶頂期にいたのです。

ですが、ある夜すさまじい嵐とともにやってきた男が彼の家のドアをノックしたのでした…。

ホイットマンディーは暖かい居間の椅子に腰かけぼんやりと妻の後姿を眺めていました。つまは暖炉の前の揺り椅子に座り大きなおなかをさすりながら、幸せそうな笑みを浮かべて編み物をしていました。

外では恐ろしいほどの風が吹き荒れ、窓には大粒の雨が当たって音を立てていましたが、ホイットマンディーの耳にはまったく聞こえていませんでした。この日徒弟たちを早くに帰らせ二人きりの静かな、幸福な時間を過ごしていたのです。

ふと彼の耳にドアをノックする音が聞こえたような気がしました。
『だれだろう…、こんな夜更けに…』

彼は窓を見ました。風が窓を揺らし、雨水が流れ落ちています。
『気のせいだろう…、こんな嵐の中訪ねてくるものなどいるものか…』

そう思ったとき、彼の耳にはつきりとドアを激しくノックする音が聞こえました。徒弟に出るように言おうと腰をあげたとき、みな

を嵐が来る前に帰らせてしまったことを思い出しました。

『ああ…、まったくこんな時に…』 そう思い玄関へ行こうと部屋のドアへ歩み寄りました。

「あら、どちらへ行かれるんですか？」 怪訝な顔で妻のステファニーが彼に問いかけました。

「聞こえなかったのか？ 誰かがドアをノックしただろ？ こんなときに訪ねてくるんだ、よっぽどの急用かもしれない」

「いえ、わたしにはノックなんて聞こえなかったわ、それにここまですノックが聞こえるはずないわ。外は嵐よ？」

「いや、確かに聞こえたんだ。ちよつと見てくる」

そういうとホイットマンディーはドアを開き、階下の玄関へ向かったのです。ドアを眺めながら歩を進めていると、確かに鉄のドアノックを激しく叩く音が響いていました。

ホイットマンディーがドアを開けるとそこに黒いローブを纏った大きな男が立っていました。青い顔をして堀の深い顔…。男の顔を見つめたとき大きな雷鳴とともに稲光がそとを明るく照らし出しました。すると男の顔が一瞬薄青く透き通り、肌の下に恐ろしい頭蓋骨が透けて見えたのです。

ホイットマンディーは思わず声をあげそうになりました。しかし声を上げることができませんでした。まるで首を絞められたかのような気分でした。

「夜分遅くすまないな…」 そういうとホイットマンディーの目の奥を深く見つめるように男は目を見開きました。

「お前にひとつ、頼まれてほしいことがあるのだ…」

ホイットマンディーは首を振ろうとするのだが体が硬く石のようになつて動かない。まるで恐怖が彼の心を脅しているようだった。

彼は首を縦に振った。彼はこう決断せざる得なかった。そうすることしか体を動かすことができなかったからだ。

「そうか…」 男は楽しげに笑った。まるでこれで親友だといわんばかりだ。

「剣を作ってもらいたいのだ」

「ええ、ええ… かまいませんとも、ただ…、いま注文が立て込んでまして…」 頭の中でこの仕事断る算段を必死に探しました。

「なに、どれも徒弟にやらせればいい仕事ばかりだ、それよりも俺の持つてきた仕事はお前にしかできない。魅力的な仕事…」 男は口一本の中から一塊の鉱石を取り出しました。「ヴァルハラ」の鉱石だ…」 男がその鉱石をホイットマンディーに差し出しました。

「ヴァルハラ…」 ホイットマンディーは吸い寄せられるように手を伸ばしました。その鉱石はずっしりと重く銀色に輝いています。ぼんやりとあたりに白い光を投げかけながらもあらゆるものを光の深淵へと吸い込もうとしているかのようでした。

「そうだ、名前くらいは知っているだろう…。神々の宮殿…。英雄たちの殿堂と言われている。戦いに明け暮れた英雄たちの魂を迎え入れ、死してなお戦い続ける定めを負わせる…」 男は薄気味悪い声をあげて微かに笑いました。まるで天国と言われる場所でありながらその場所は地獄だといわんばかりの冷笑です。

「こ、これで… なにを作れと…」 ホイットマンディーは信ぜずにはいられませんでした。目の前の鉱石の輝きは確かにこの世のものと思えなかったのです。そして彼の心の中の好奇心、野心、自尊心…、すべての人間的な感情がヴァルハラ」の存在を求めているのを感じ取りました。

「剣だ… 『安息の剣』…」 男はそういうとまた懐から何かを取り出しました。それは薄汚れた一冊の本でした「お前の知りたいことはここにすべて書かれている…」

「ああ…」 ホイットマンディーは首を振った。「おまちください、安息の剣とは… 『レイクイェムソード』と言われているもののごとでございましょう。この世にひとつといわれている…それがどのようなものかも知られていません。ただの伝説…」

「ならば、その眼で確かめてみるがいい」 男は手に持った本をホイットマンディーのまえに突き出した「さあ、手に取れ、契約を交わ

そうじゃないか……」本を手に取りそれを手の内で開いた。

ホイットマンディーはだまって書物を閉じる、ヴァルハラ of 鉱石を書物の上へのせ差出した。

「どうやら……わたしには無理のようだ……。この書物には何も書かれていない……白紙だ……」

ホイットマンディーはくやしさと恥ずかしさをその表情に浮かべた。屈辱……。まるで自分が否定されたかのようなようだ。自分は選ばれなかった……。

男がそれを受取るうとしたときホイットマンディーが身を引いた。汗が額に流れ、口惜しいかのように身をこわばらせている。渡したくはなかった。

ヴァルハラ of 鉱石の輝きを見て心動かされない鍛冶屋がどうか……？伝説の剣と聞いて心動かされない鍛冶屋がどうか……？わたしのように一流の腕を持つならなおさら……たとえ、依頼人がこの悪魔のような男であつても……。

このままわたしのような一流の鍛冶屋が鉄や鋼を打ち続けて一生を終えてしまうのか？

わたしのほかにこの鉱石を扱える人間などいないはずだ……！！

「どうした……？作りたいのだろう……。諦めきれぬのだろう……。俺はこの時をどれほど待ち望んでいたことか……」

男は冷笑交じりに話す。そして言った。

「教えてやるう、レクイエムソードは唯一、不死を断つことができる剣だ……。」

『インモータルキラー』もしくは『アンデッドキラー』のこと

不死…。その言葉を聞いてホイットマンディーは首をかしげずに
いられませんでした。伝説のツルギ…。それが…。この世に不死のも
のなど存在しない。それがホイットマンディーが出した答えだった
のです。

「不死など存在しない…。そう言いたげだな…」男は笑みを絶やさ
ずいいました。まるでホイットマンディーを小馬鹿にするように笑
っています。「教えてやろう…。思えば言ったな、この世に一つだけ
安息の剣は存在すると…。その一本を後生大事に…。わが物顔で…。や
つが、やつが持っているんだ。不死なるものがな…。！」男は笑っ
ていましたが、月明かりに照らさる泉のように澄んでいたブルー
の瞳が、燃え上がるような赤色に代わり、その瞳が怒りに満ちてい
るのがホイットマンディーにはわかりました。「おまえが知らぬだけ
だ、この世にも、あの世にも不死のものなどごまんといえるのだ。わ
たしはそれが我慢ならんだ！！」男は足を一步踏み出し、ホイッ
トマンディーに詰め寄ります。

ホイットマンディーは恐ろしさに身をすくめ、ただただうなずき
ながら尋ねました。「あなたは、あなたはいったい何者なのですか！
！？どうしてそのような…」

「決まっているだろう！不死のものを根絶やしにするのだ！おれ
が何者か、だと！！笑わせるな！！お前が俺に名を与える！！」不
死を断つ者』それが俺の名だ！！」

ホイットマンディーの震えていた膝がとうとう糸を断たれたように
折れ曲がり床に腰を落としてしまいました。男が腰を落とし、さら
にホイットマンディーに詰め寄ります。

「契約の時が来たのだ…。さあ、書を開け…。そしてお前の手を差

し出すんだ……！」男の恐ろしい瞳が見開かれました。

ホイットマンディーは声にならない悲鳴を上げながら震える手で分厚い書物の表紙をなんとか開きました。そして力の入らない腕をなんとかあげ、手の平を男に向けました。腕は恐ろしく震え、制止させることができませぬ。涙で視界が揺らめき今にも頬をつたい涙が落ちてしまいました。

男がホイットマンディーの腕を鷲掴みにしました。とても強い力で抵抗などできそうもないくらいです。男は手のひらを上に向けさせ、暗い闇のようなローブの影からもういっぽうの腕を出しました。人差し指を伸ばすとホイットマンディーの手のひらに一筋の線を引きます。

ホイットマンディーの手のひらはまるでザクロがぱっくりと口を開いたように傷をつくりました。肉の断片、白い骨が見えたかと思うと血が吹き出し、不快な音を立てて白いページの上に滴り落ちていきます。ホイットマンディーは恐ろしさに震え、頬を涙がつかいました。

赤くページが染まると同時に漆黒の文字が浮かび上がり始めました。まるで蛆が這うようにじわりじわりと浮いてきます。ホイットマンディーの血は染み渡り、どうやら数ページを赤く染め上げたようでした。

「どうだ……文字が浮かび上がったではないか……お前が『安息の剣』を完成させるんだ……もう、後には引けない、わかったな……」男の瞳の燃えるような赤が、波が引いていくように冷たいブルーに変わっていきます。男は立ち上がり笑みを見せました。

「ホイットマンディー……俺は完成を心待ちにしているぞ……」恐ろしいその男の笑い声がホイットマンディーの耳に響きました。男がドアに向かい一歩前に踏み出したその時、地上を揺るがすように雷鳴が引きわたりました。まるで月が落ちてきたかのようにすさまじい音です。外は明るく瞬いたかと思うと、外に踏み出した男の体は一瞬にして光の中に掻き消えてしまっていました。

11・スプリング・ヒールド・ジャック - 『睡魔』

その日からホイットマンディーはまるで人が変わったように鉄のハンマーを振るい、ヴァルハラを鍛え続けました。高炉の前でまるで炎を纏ったかのように赤く照らし出されるホイットマンディーの姿は徒弟、そして妻ステファニーでさえも声をかけることがはばかれるほど恐ろしい姿に見えました。

ホイットマンディーのそばにはあの書物が投げ出されていました。彼はその書物に書かれている通りに行動しました。ページが進むと自らの体を傷つけ、血を書物にささげるのです。彼の体のいたるところに傷ができていきます。彼の体のどこを傷つけ、どの血がほしいのかすべては書物に指定されていました。

彼の心の中には功名心と自尊心が渦巻きます。ヴァルハラを鍛え続けるの先にはあたかも神が存在しそれが自分と重なって思えるのです。神なる存在、そう考えたとき自らの腕がいままさにそれに届かんとしているのを感じ取ることができました。

そしてもう一つ、彼の感情を支配するものがありました。それは言い知れぬ恐怖です。

彼は寝る間を惜しんで高炉に向かいましたが、彼も人でした。体の力は時とともに失われ、強い睡魔が瞼を重くします。

彼は恐ろしい悪魔に追われていました。地獄の鬼でした。睡魔に負ければまるで別のドアが開いたかのように夢の世界へ落ちてしまします。しかし、それは夢ではありませんでした。彼にはすでに夢も現実もありません。ヴァルハラを鍛え続け、地獄の鬼から逃げ続けるのが彼がもつことができる唯一の人生だったからです。

地獄の鬼は睡魔に負け瞼を落とした時にやってきます。落ちた瞼は一瞬のうちに軽くなります。しかし瞼を開くとそこは針のような岩が地面から突き出している岩と砂だけの世界でした。その岩にか

がみ込み急いで身を隠します。

やがて翼をはためかせる音が遠くから聞こえ始めます。ホイットマンデーは両腕をにぎりしめ、拳を口に加え強くかみしめます。恐怖で声を上げるのをそうやって我慢するためです。痛みで恐怖を打ち消すためでもありません。彼は岩陰ですつと息を殺します。

「ホイットマンデiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii…ホイットマンデiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii…」

ホイットマンデーの肩が恐怖で震えています。

地獄の鬼の聲は翼の音が大きくなると同時にしだいに近づいてくるのです。

「ホイットマンデiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii…いるんだろ…、そこに…。今日も来てるんだろ…」

彼は立ち上がると同時に死に物狂いで走り出します。大きな岩をかわし、小さな岩を飛び越えました。自分の呼吸が荒々しく耳に響きます。ホイットマンデーの心は今にも自分の首が胴体から切り離されるような思いに支配されていました。

「ホイットマンデiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

突如として、翼の羽ばたきが嵐に揺れる木々のような激しさに変わりました。

ホイットマンデーの首が飛んだとしてもおそらく胴体だけでも走り続けることができるほどに、彼は必死に走り続けました。

「ぐああああ…！」

彼の叫び声が岩場に響き渡りました。それは恐怖とはげしい痛みから出た叫び声でした。彼のひざ下に岩がぶち当たったのです。彼は地面に転がり痛む足を抑えました。転がりながら翼を広げ恐ろしい速さで向かってくる地獄の鬼を視野に捕らえました。

褐色の肌、炎を纏っているような真っ赤な翼がはげしく風を掻いています。足の指が手の指のように長い、きつとその足でホイットマンデーを捕まえるつもりでいるのでしょうか。手には鋼のように真っ黒な長く伸びた爪が生えています。それはホイットマンデーを切り刻むため。そして首から徐々に顔に向かって緑色に変色して

いました。瞳は白目の部分がなく鉄の球をはめ込んだような漆黒の瞳をしています。緑色の恐ろしい顔には二本の歪んだ角が生えていました。

「来るな！来るなああああ……！！」ホイットマンディーはそう叫び、恐ろしさに耐えかねて目を閉じました。

「おいおい……しっかり走れ、世話を焼かせるな……」ホイットマンディーが目を開くとそこにあの黒いローブを纏った男の背中があります。男はホイットマンディーと地獄の鬼の間に立っています。ちらりとホイットマンディーに横顔を見せるといいました。

「今日はもう少し走れると思ったんだが……。いいか、睡魔が訪れるまで走り続ける……！いつもどおり走り続ける、振り向くんじゃない……！」

ホイットマンディーは立ち上がりました。手には血がついていました。膝から血が流れ出しています。

男はこの恐ろしいもう一つの現実の世界でかならず彼を助けにあらわれるのです。彼は無言でなんともなづく走り出しました。ひどく傷む膝を忘れたかのように必死で走りました。恐ろしい鬼の声が聞こえます。

「またここで待っているぞ……！！ホイットマンディー……！！ホイットマンディー……！！」

彼は恐怖からでしょうか、好奇心からでしょうか、あるいは男の身を案じてでしょうか、いつも彼を助けに現れるあの男のことが気になり、ほんの一瞬後ろを振り向きました。

ローブの男が鬼の首を掴んで持ち上げていました。鬼は首を絞める腕を両腕で握り返し、羽をばたつかせ、足の指で男を引きはがそうともがいています。

「ぐう……、離せ、離せ、お前ごときが俺様の邪魔をするんじゃない……。たかが死神の分際で……」

ホイットマンディーにはそう聞こえました。いや、二人の姿を見

ただけで何も聞こえなかった。彼は必死にそう思おうと努めました。ただひたすらに張り続けることだけを考えました。彼を救うことができるのはたった一つ。睡魔だけ、だからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5274x/>

墓守キッチンヨムのおとぎ話

2011年11月20日18時57分発行